

第2回

宇治市歴史的風致維持向上計画検討委員会

検 討 資 料

平成 22 年 6 月 24 日

【資料目次】

1. 宇治の歴史的風致の維持及び向上に関する方針の検討

1-1	宇治市における維持向上すべき歴史的風致の全体像	1
1-2	宇治の歴史的風致の維持及び向上の意義	1
1-3	宇治の歴史的風致の概要	2
	（1）信仰と遊楽の空間、宇治川にみる歴史的風致	2
	（2）お茶のまち宇治にみる歴史的風致	9
	（3）暮らしに息づく祭礼行事にみる歴史的風致	13

1. 宇治の歴史的風致の維持及び向上に関する方針の検討

1-1 宇治市における維持向上すべき歴史的風致の全体像

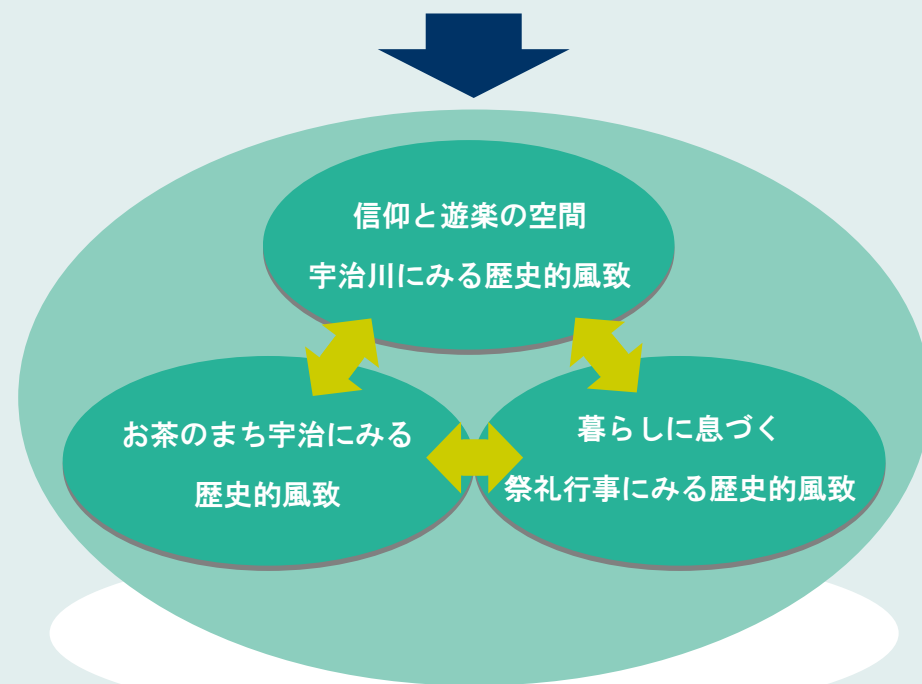
歴史的風致とは

地域におけるその固有の歴史及び伝統を反映した人々の活動と、その活動が行われる歴史上価値の高い建造物及びその周辺の市街地が一体となって形成してきた良好な市街地の環境（法第1条）

宇治市における歴史的風致の全体像

宇治市には、山紫水明の宇治川にみる人々の往来と、伝統産業としての宇治茶の生産とお茶に関わる様々な文化的活動、そして古くから行われている伝統的な祭礼行事が受け継がれ、一体となって、私たちが目にすることのできる美しく趣きのある風景となっている。

宇治市の維持向上すべき歴史的風致とは、宇治の自然風土と、奥行きと深みのある歴史過程の中から生み出された、上記に掲げた伝統的な諸活動が行われる、良好な市街地の環境である。



1-2 宇治の歴史的風致の意義及び向上の意義

宇治市は、京都と奈良の中間に位置し、古来より宇治川渡河点としての交通の要衝地、平安貴族の別業の地として栄え、全国的に有名な宇治茶の産地として名を馳せ、発展してきた。

これまで本市では、豊かな自然や、世界遺産である平等院や宇治上神社などの歴史・文化資源、平安時代をテーマとした源氏物語のまちとして、観光誘致を展開してきた。

そうしたなか、宇治川の自然景観を骨格に、兩岸に展開する社寺の荘厳な雰囲気や平安時代以来の街区・街路を継承する特徴的な都市景観、さらにはそれを大きく包み込む伝統的宇治茶の生業に関する景観が重層的に融合し、独特の文化的景観が国に評価され、平成21年2月に重要文化的景観として選定された。

一方、平成19年9月に宇治川太閤堤跡が発見され、平成21年7月に国の史跡に指定されたことを受け、「源氏物語のまち」に「秀吉と茶の湯」という新たなテーマを加えた「宇治茶と歴史・文化の香るまちづくり構想」を策定し、実現に向けて7つの戦略を定めた。

- ① 宇治川太閤堤跡の保存・活用と一体となった観光交流拠点の整備
- ② お茶に関する様々な文化・伝統をさらに発展させ、未来に継承
- ③ 宇治の景観を守り育てるとともに、まちの賑わいを創出
- ④ 公共交通による来訪と徒歩による周遊観光を促進とともに、宇治へのアクセス向上に向けた取り組みを推進
- ⑤ 安心して暮らせる地域の生活環境の改善と、環境負荷の小さなまちづくり
- ⑥ 観光滞在時間の増加と観光シーズンの通年化を推進し、観光消費の拡大を図る
- ⑦ 様々な手法を活用した情報発信の充実による宇治のブランド力の向上

これらの戦略に基づき、『歴史と文化の風格が漂うお茶のまち・宇治』を実現する上で、そこに暮らす人々や、来訪者の活動を通じて形成されてきた宇治の歴史的風致について検証し、これを維持するとともに、さらに発展させることが重要である。

1-3 宇治の歴史的風致の概要

(1) 信仰と遊樂の空間、宇治川にみる歴史的風致

平安時代後期になると、平安貴族達は宇治川の山紫水明の自然美に着目し、当時の浄土信仰の高揚のなかで、宇治川の両岸に藤原頼道が築いた平等院鳳凰堂、対岸の離宮社（宇治神社・宇治上神社）をはじめ、多くの神社仏閣が集まるようになる。宇治川周辺は、遊樂の地であることに加え、宗教的雰囲気 of 濃厚な空間が生み出され、貴族社会においては、信仰と遊樂とが不可分の形で存在していたといえる。

庶民の旅は、信仰にもとづく社寺の参詣を中心として行なわれ始めた。それは王朝貴族たちの初瀬詣や、鎌倉武士に流行した熊野詣に端を発して、室町時代に盛んに行なわれた伊勢参宮に移行する。中世における伊勢参宮に付随して流行しはじめたものに、西国三十三所観音霊場巡拝があり、宇治には第十番札所の三室戸寺が存在する。

江戸時代、19世紀前半は庶民の旅が最も盛んに行なわれた時期であり、その目的は、伊勢参宮や京・大和の寺社巡りを旅立ちの表向きの理由としながら、遊覧を目的とするものへと移行した。宇治では平等院をはじめとする社寺詣とともに、宇治川遊覧は活況を呈するようになる。

また、『都名所図会』などに代表される名所案内形式の挿画入り冊子や、一枚刷り物の出版も、それらに先立って行われていたが、宇治においても茶商や廻船問屋の手によって宇治名所を鳥瞰した木版一枚刷りの名所案内が数種出版されている。宇治名所案内図が多数出版されたことは、宇治が全国に著名な名所であり、遊覧する旅客が多かったことを物語っている。なかでも、文久3年（1863）、浪華の暁晴翁が画工松川半山と共に『宇治川兩岸一覽』上下二冊を上梓したのは、それら宇治名所案内の集大成ともいえるものであった。



幕末の名所図の例（宇治名所古跡之絵図）宇治市歴史史料館蔵
※宇治から黄檗にかけての名所を凝縮して一枚に表現している。

現在も、宇治川周辺は世界遺産の平等院、宇治上神社をはじめ、多くの社寺仏閣が集まる地域である。文化財指定された建造物や庭園、美術工芸品などが多く所在するほか、秀吉の茶事と関連の深い宇治橋、鵜飼いや舟遊びといった歴史・文化的遺産に恵まれたところである。宇治に観光に訪れる人も、その多くが宇治川沿いを散策し、社寺を参詣することを主な目的としており、宇治川は信仰と遊樂が一体となった空間として、来訪者を受け入れてきた伝統が受け継がれている。



宇治橋から眺めた宇治川の景観



宇治川散策を楽しむ来訪者

① 宇治川遊覧

～宇治川とその両岸

- ・藤原道長が都から宇治を訪れる時に舟をよく利用したことは記録が伝える。これは単なる交通手段としてではなく、舟遊びを兼ねたものであった。
- ・江戸時代、宇治橋近くの川岸には水運関係とともに旅館が建ち並び、舟遊びを提供していた。
- ・現在もこの景観は継承されており、宇治川両岸には旅館が集まり、四季折々の美しい川の眺めを楽しむことができる。



現在の観光船



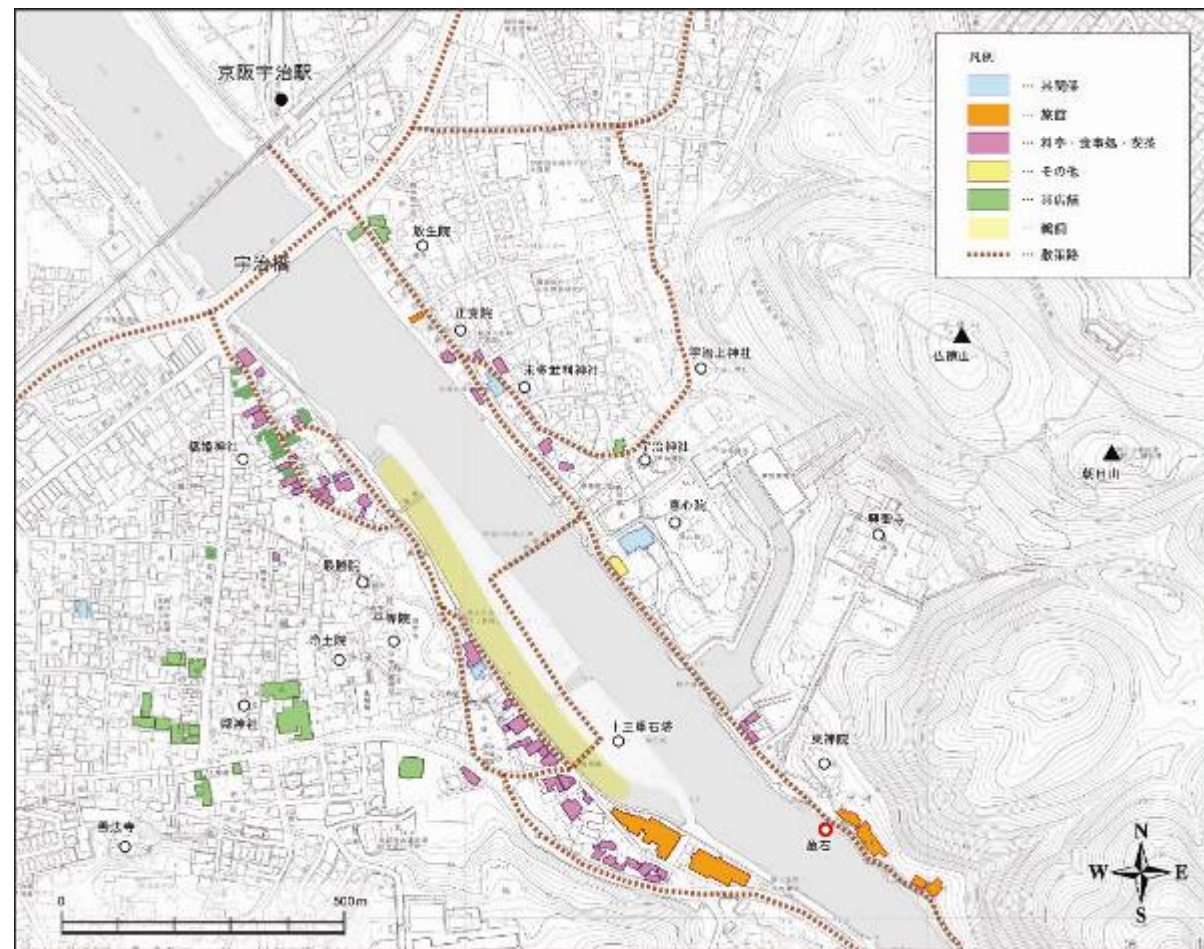
春の宇治川周辺の景観



舟遊び（大正期）



舟遊び（昭和30年）



宇治川沿いにみる飲食店・旅館等の施設分布

② 夏の風物詩・鵜飼い

～中の島付近

- ・『蜻蛉日記』天禄2年（971）条に宇治川の鵜飼が記されており、平安時代に鵜飼が行われていたことがわかる。
- ・鎌倉時代まで鵜飼記事は散見されたのち歴史から消えるが、昭和初年に復興された。昭和4年には、7月5・6・7日の3日間を「鵜飼デー」と称して約百羽の鵜を用い、宇治川の上流天ヶ瀬から宇治橋に至る一帯に、燈籠流し、宇治音頭流し舟、水中花火などの余興をもみせるなど盛況であった。
- ・今日の宇治の鵜飼は、毎年6月から秋にかけて行われており、戦前の賑わいに比べれば小規模とはなったが、宇治川の夏夜の風物詩として定着している。



宇治川の鵜飼

③ 魚つりと川魚料理

～宇治川両岸

- ・川魚漁は基本的に巨椋池で行われており、宇治川では遊漁的なものが多かったと考えられる。江戸時代の『都名所図会』では、宇治川の鮎を網ですくい取り提供する「鮎汲み」が描かれている。近代以降は「鮎汲み」の姿は見られず、鮎釣が宇治の一風景としてしばしば絵葉書となっている。
- ・また、宇治川で獲れた鮎やウナギを使った料理は、川沿いの飲食店で提供された。宇治川の鰻は美味で有名だったとされ、「宇治丸」と呼ばれる鰻鮓は、宇治の特産品として知られていた。
- ・鮎や鰻に関しては、河川環境の変化でめっきり減少しているが、魚釣りに興じる姿は今もよく見受けられる。



鮎汲み（都名所図会）



魚釣りの風景



宇治川での鮎釣り（古写真）

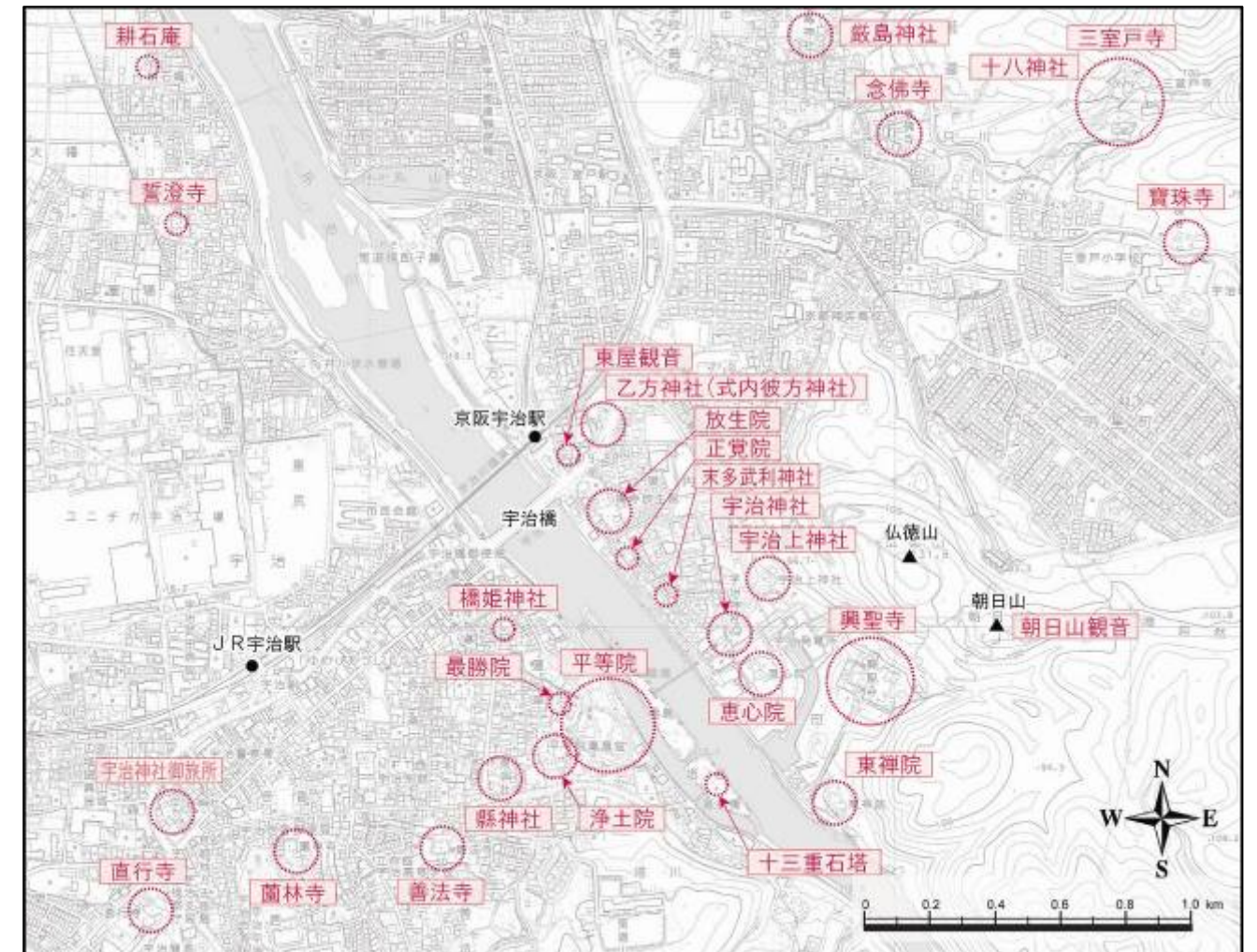
④ 社寺仏閣群

～宇治川兩岸

- ・宇治川の両岸には、世界遺産の平等院、宇治上神社をはじめ、社寺仏閣が集まっており、文化財指定された建造物や庭園、美術工芸品などが多く所在する。宇治川を挟んで両側に社寺仏閣が広がり、厳かな空間として存在している。
- ・また、あじさい寺として有名な三室戸寺は、西国観音霊場第10番札所であり、宇治川兩岸の寺社とともに、全国から参拝に訪れる人々の往来の姿が絶えない。西国三十三所観音霊場巡拝は、中世における伊勢参宮に付随して流行しはじめたものである。江戸時代以降も、西国巡礼は伊勢参宮を終えてのち、熊野路を西国一番札所那智山青岸渡寺へおもむくコースが正規のものとされている。西国巡礼は、奈良興福寺の南円堂から奈良街道を北上して宇治に入り、三室戸寺に詣でてさらに北へ向かい、上醍醐寺へとおもむくものである。



平等院（国宝 世界遺産）



宇治川周辺の社寺の分布



宇治上神社本殿（国宝 世界遺産）



橋姫神社



三室戸寺



放生院



興聖寺庭園



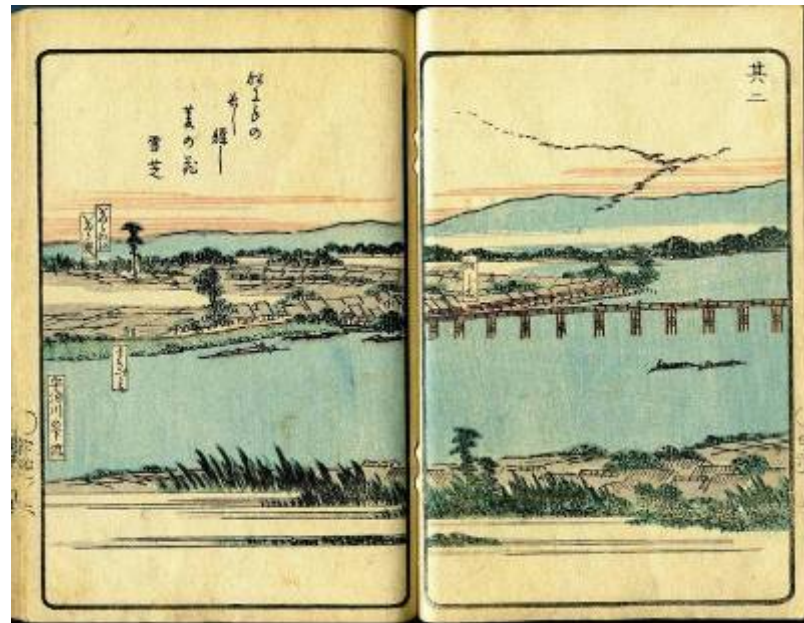
宇治神社



縣神社

【参考資料】『宇治川兩岸一覽』文久3（1863）年

- ・多色刷りで刊行された、宇治の名所案内記。伏見から田原川の合流点までを対象に、宇治川とその周辺の名所を紹介している。
- ・宇治川沿いの景観は、宇治橋周辺以外は巨椋池の干拓や天ヶ瀬ダムの建設等により変化がみられる。

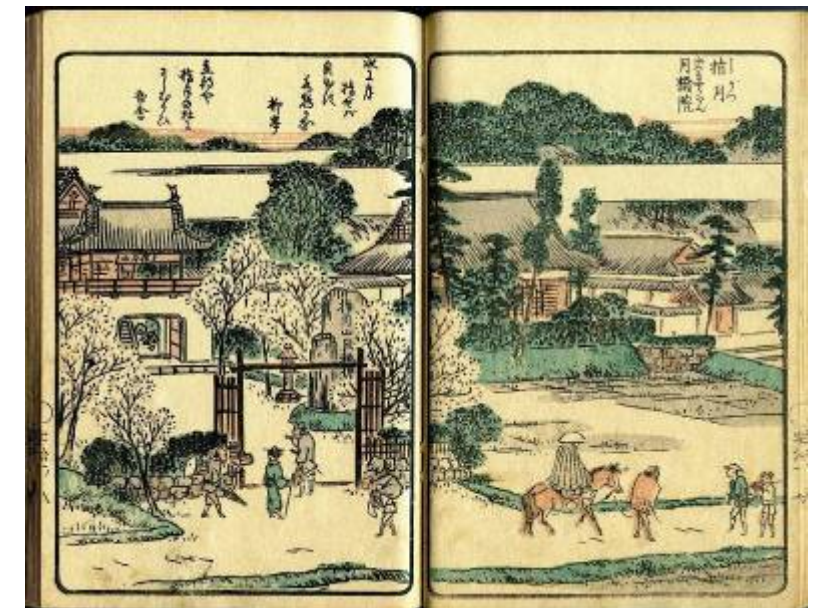
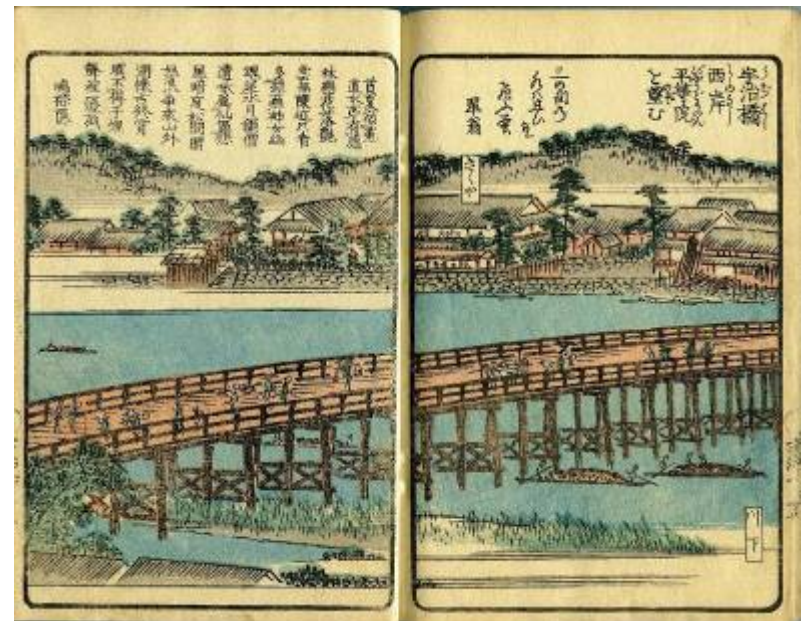


豊後橋 向嶋 巨椋堤 巨椋江『宇治川兩岸一覽 上』

※豊後橋は、現在の観月橋（京都市伏見区）



宇治橋 西岸 平等院を望む / 東詰 通園茶屋『宇治川兩岸一覽 上』



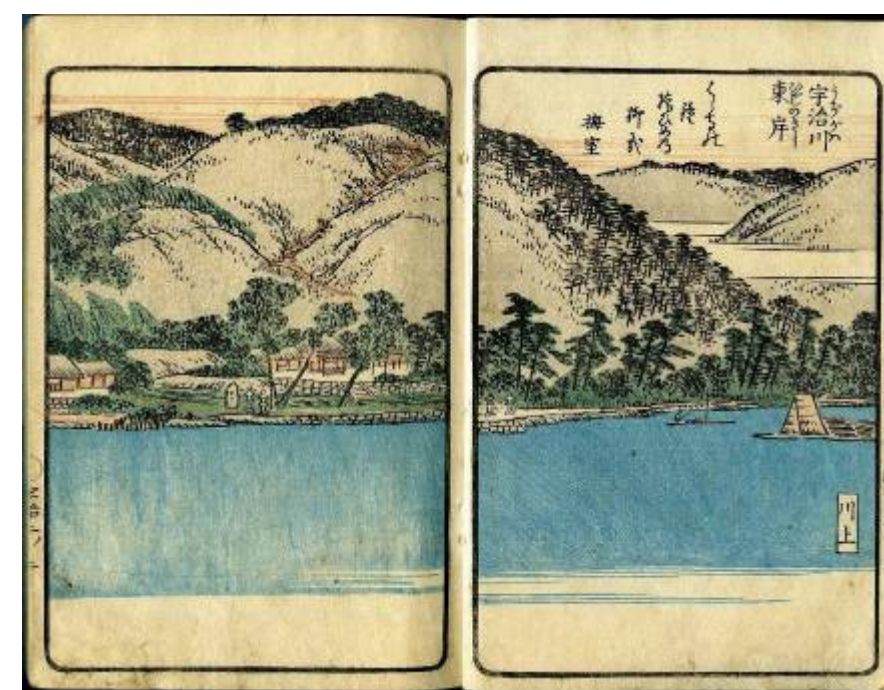
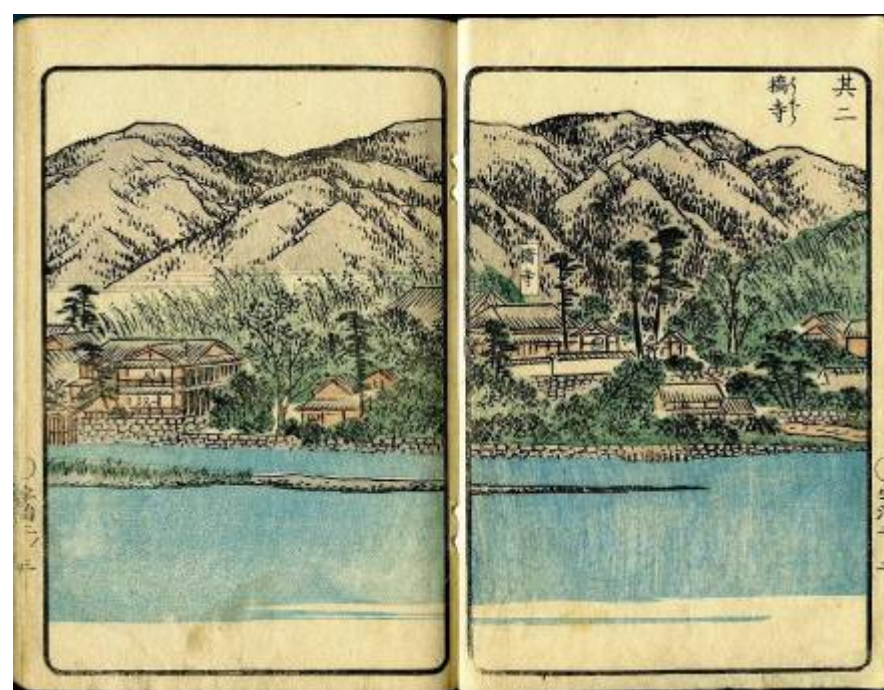
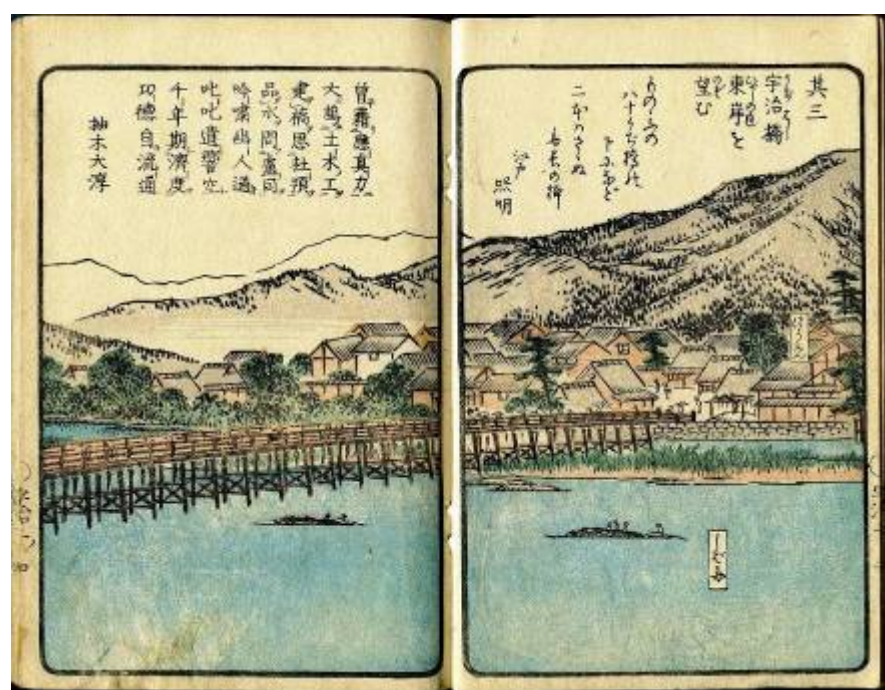
指月 月橋院（現在の京都市伏見区）『宇治川兩岸一覽 上』



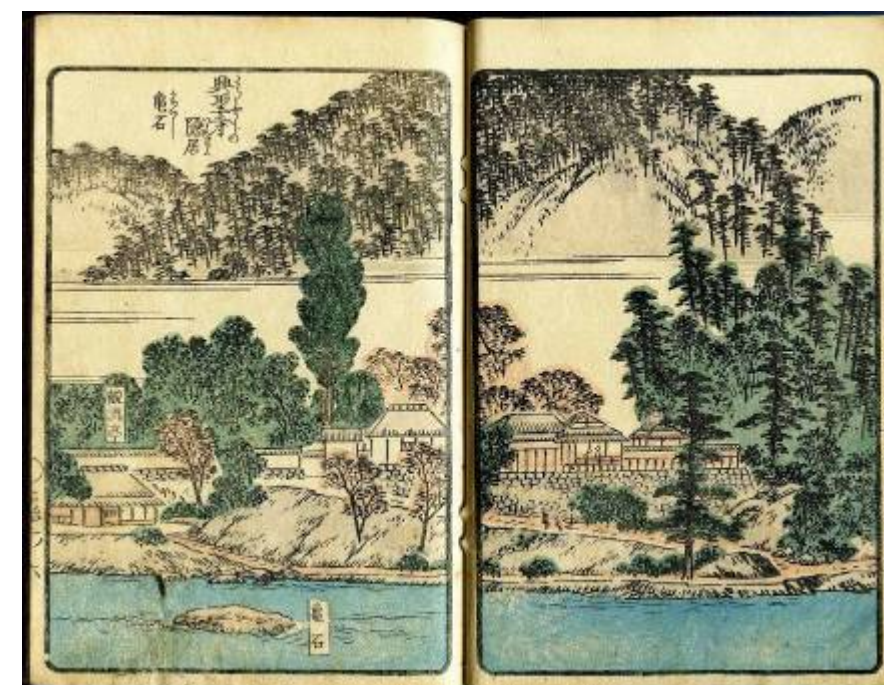
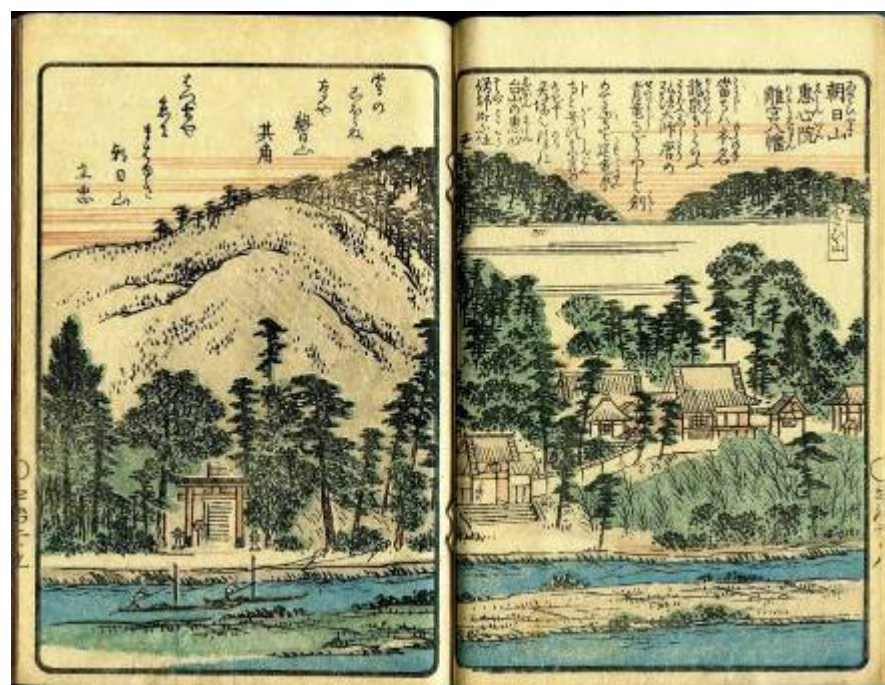
六地藏大善寺（現在の京都市伏見区）『宇治川兩岸一覽 上』



黄檗山 『宇治川兩岸一覽 上』



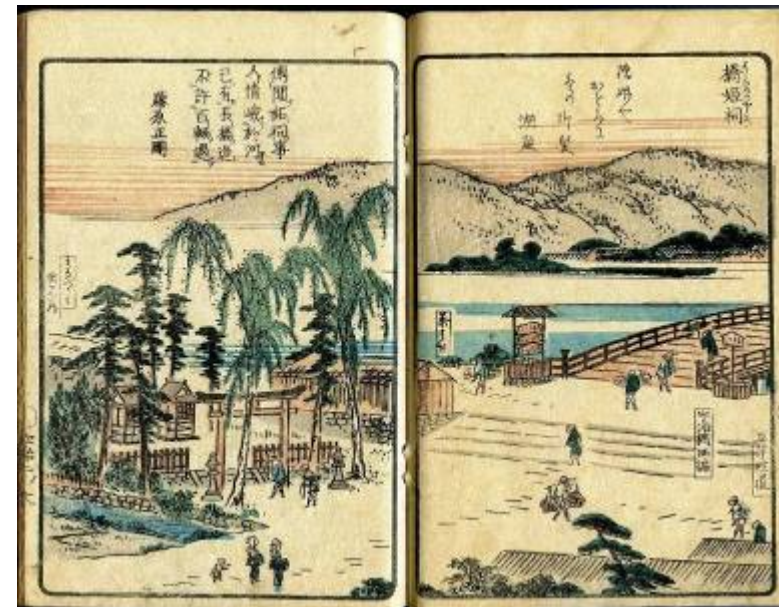
宇治川東岸 / 橋寺 / 宇治橋東岸を望む 『宇治川兩岸一覽 下』(宇治橋の上流部)



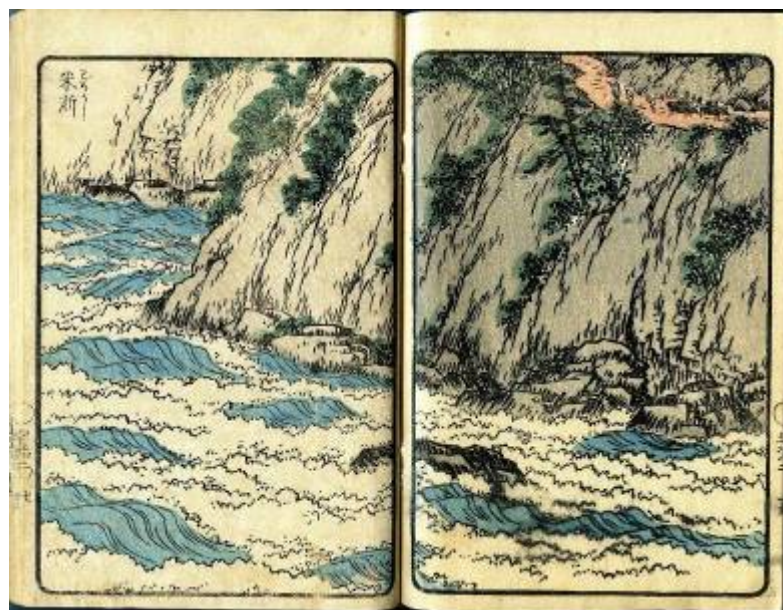
興聖寺の隠居 亀石 / 興聖寺 / 朝日山 恵心院 離宮八幡 『宇治川兩岸一覽 下』



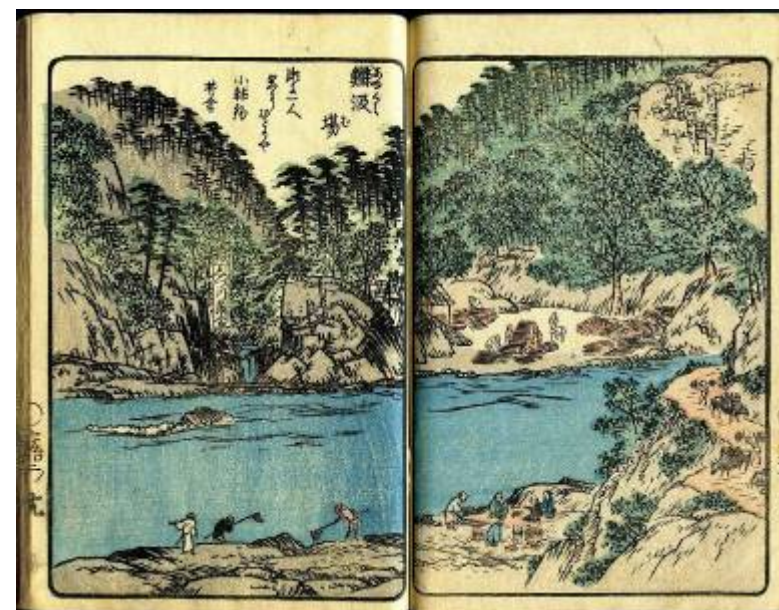
釣殿観音 扇芝 『宇治川兩岸一覽 下』



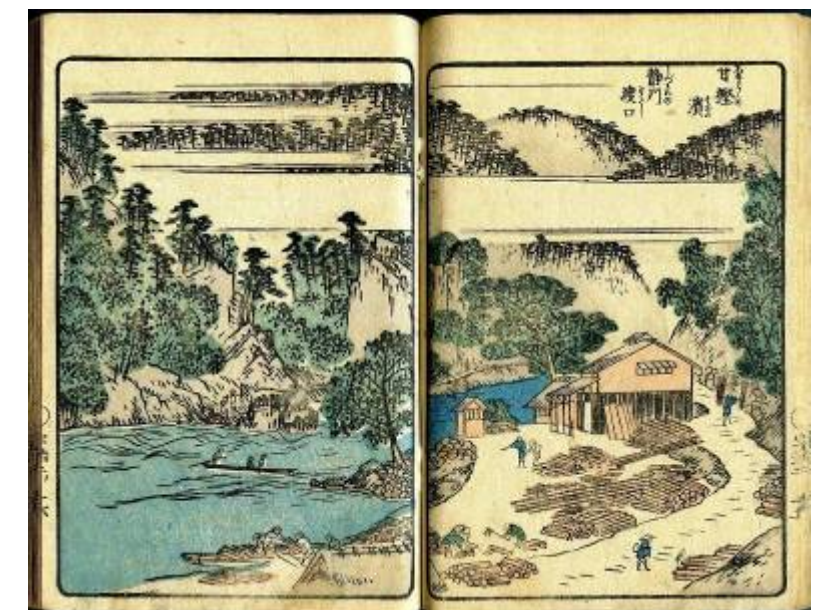
橋姫祠 『宇治川兩岸一覽 下』 ※明治期に現在地に移る。



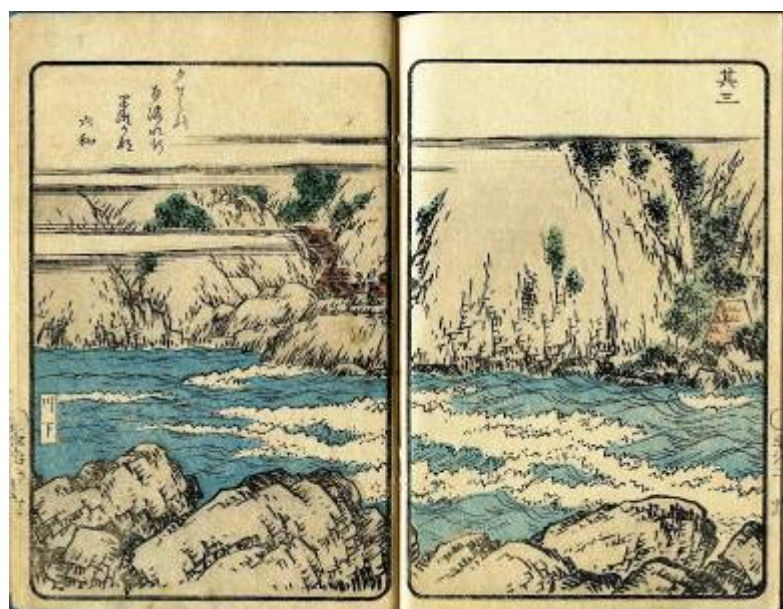
米浙 『宇治川兩岸一覽 下』



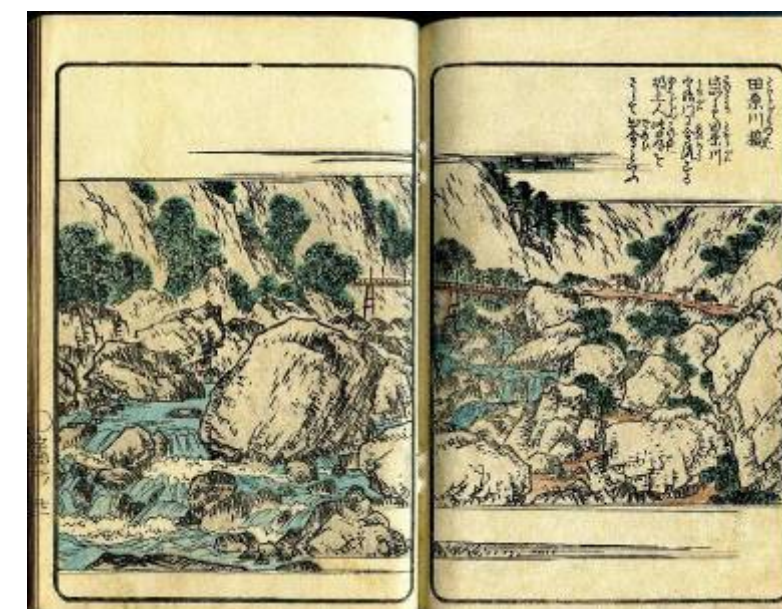
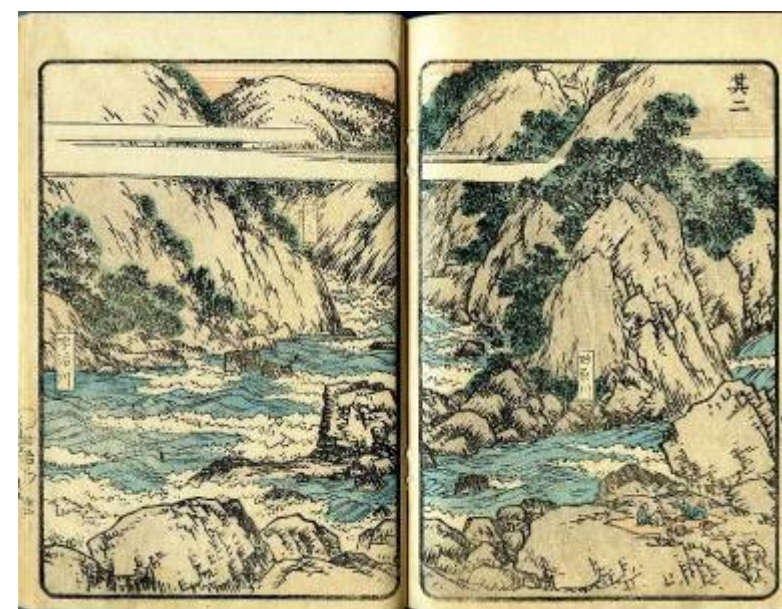
鮎汲場 『宇治川兩岸一覽 下』

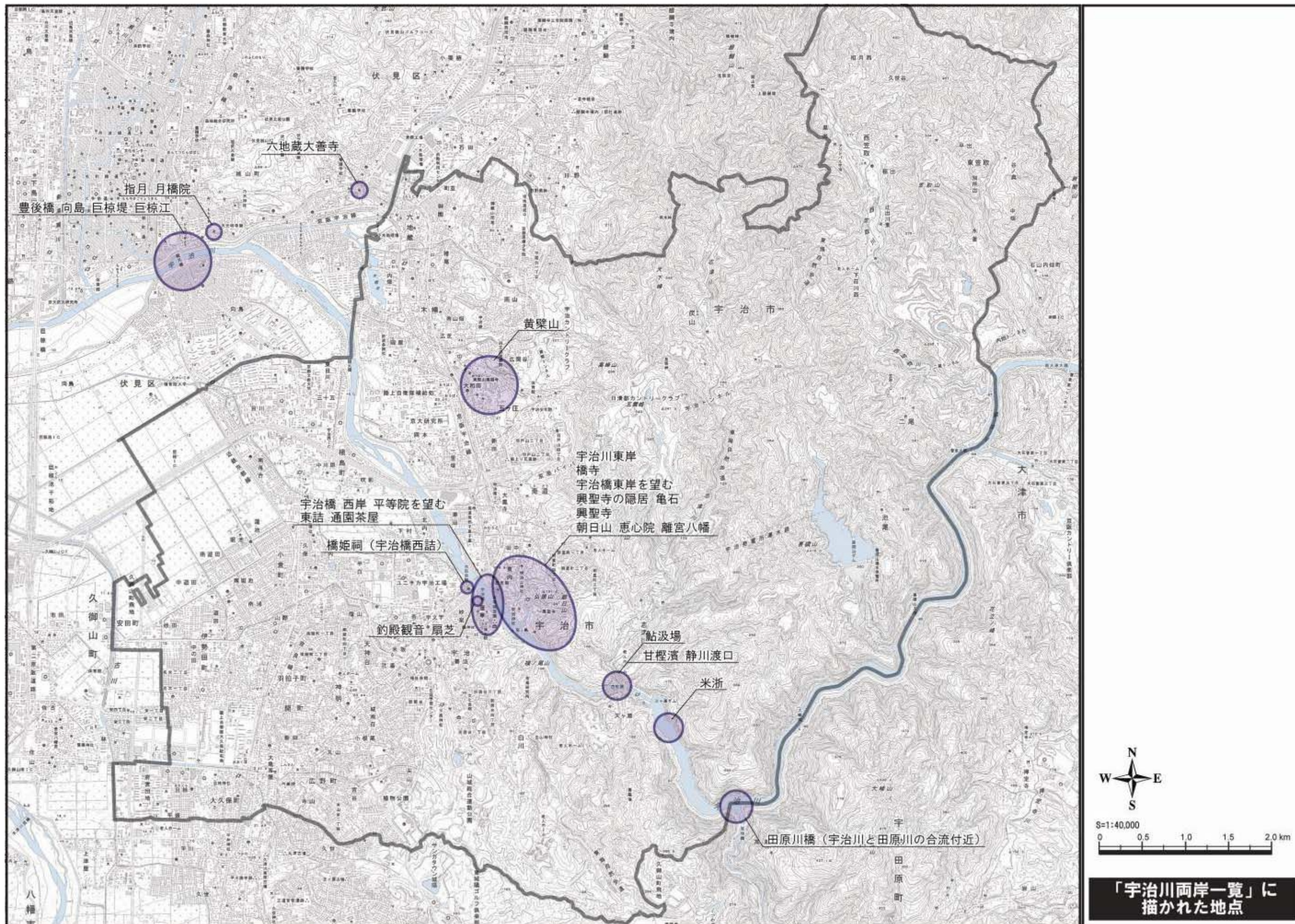


甘樫濱 静川渡口 『宇治川兩岸一覽 下』



田原川橋 『宇治川兩岸一覽 下』





「宇治川兩岸一覽」に描かれた地点

（２）お茶のまち宇治にみる歴史的風致

宇治の特産品としての宇治茶は、中世から続く宇治の伝統的産業であり、全国的に著名である。宇治茶の基本は抹茶となる碾茶であるが、近代以降は玉露などの高級煎茶の生産も行われるようになった。

宇治茶生産の特徴は、茶園等の第１次産業から、製茶などの加工に関する第２次産業、流通・販売に係る第３次産業までの産業部門が明確に区別、分業されないことにある。

また、お茶に関する祭礼、茶道や茶香服など、お茶に関わる文化活動も盛んな土地柄であり、市民の日常生活の中に、多様な形で深く浸透している。

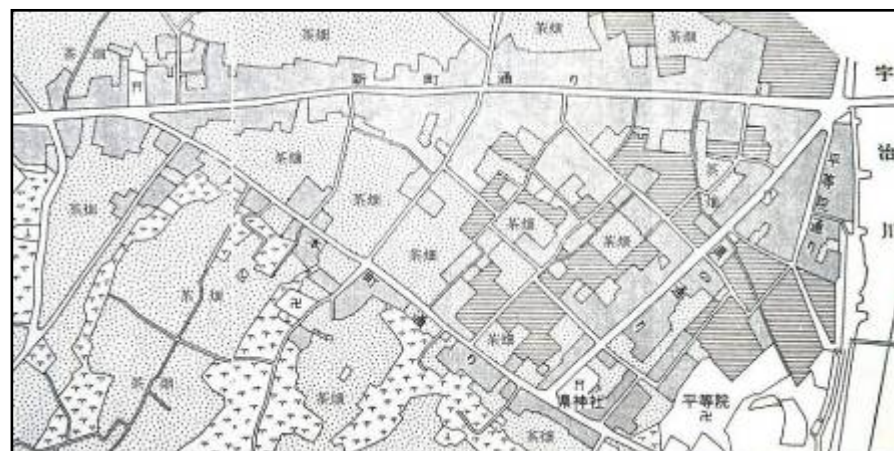
① 茶畑と茶摘みの風景

～宇治市域全体

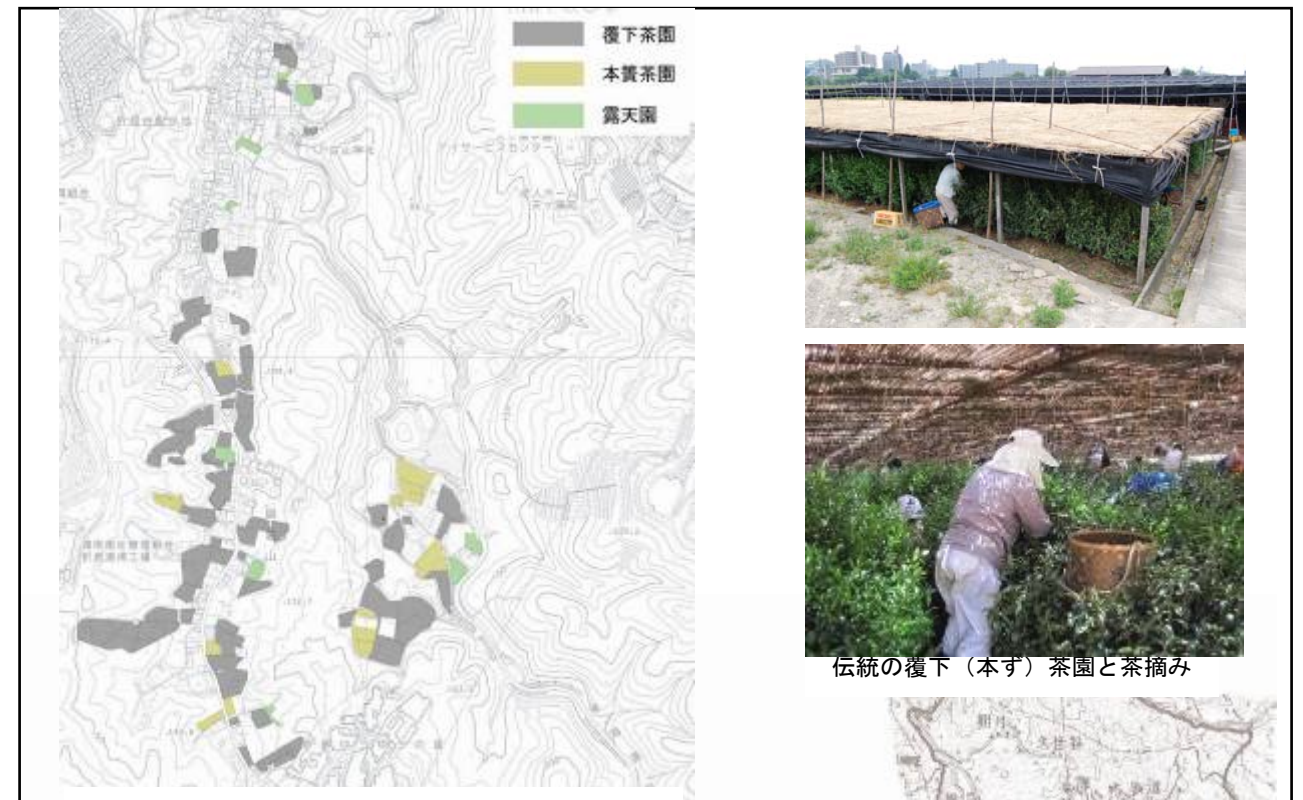
- ・茶畑の分布は、宇治、白川、木幡、小倉など山間や農村域を中心に宇治市全域に広がっているが、市街地の宅地の間に小規模な茶畑が点在しているのも特徴である。近世の絵図を見ると、宇治地区では宇治川沿いと町家裏の空閑地に多くの茶畑が認められ、都市域に茶畑が溶け込んでいたことが理解できる。また、宇治川沿いの茶畑成立には、太閤堤の築造に伴って河岸に砂地が堆積したことが大きな要因となっている。
- ・室町時代後半には、総称としての宇治茶のみならず、宇治での茶園名によって品質が評価されるようになる。いわゆる宇治七名園の成立であり、現在、宇治地区の奥山茶園のみが継承されている。市街化区域内の茶畑が急速に減少したのは、宇治市が住宅地として着目され開発が進んだ近年のことである。
- ・茶の栽培方法としては、全国で一般的にみられる露天園ではなく、茶摘み前にヨシズ（本ず）や遮光シートで茶園全体を覆う覆下園が主体であり、古くから宇治独特の茶園景観を形成している。
- ・全国的に機械刈りが主流となった現在でも、宇治では茶摘みの工程は人力で行われるため、春になるとお茶の葉を摘む人の姿が点在する茶畑の風景を今もみることができる。



現在に唯一つ伝えられる宇治七名園の一つ「奥山」

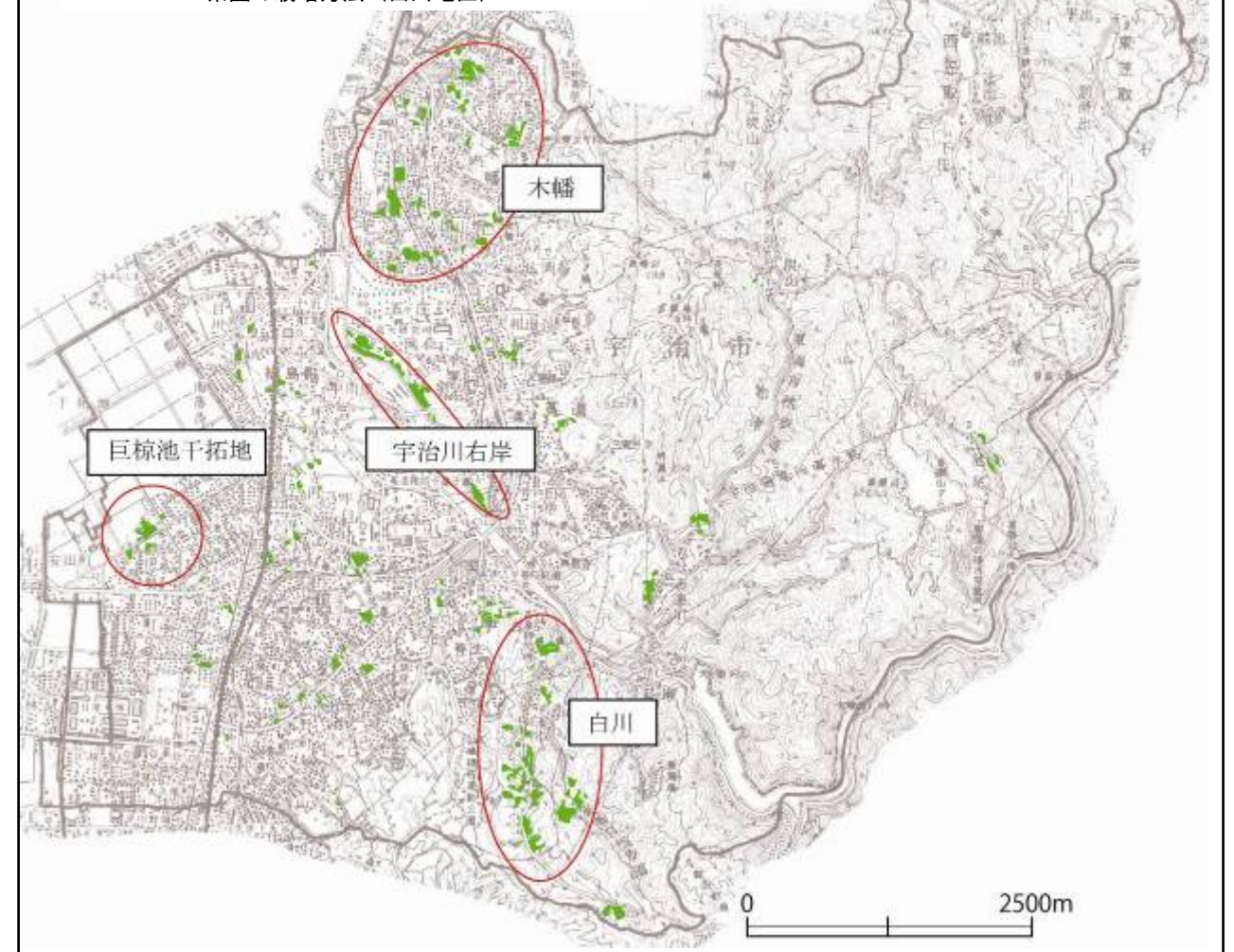


明治の茶園分布（宇治地区）



伝統の覆下（本ず）茶園と茶摘み

茶園の栽培方法（白川地区）



現在の茶園分布

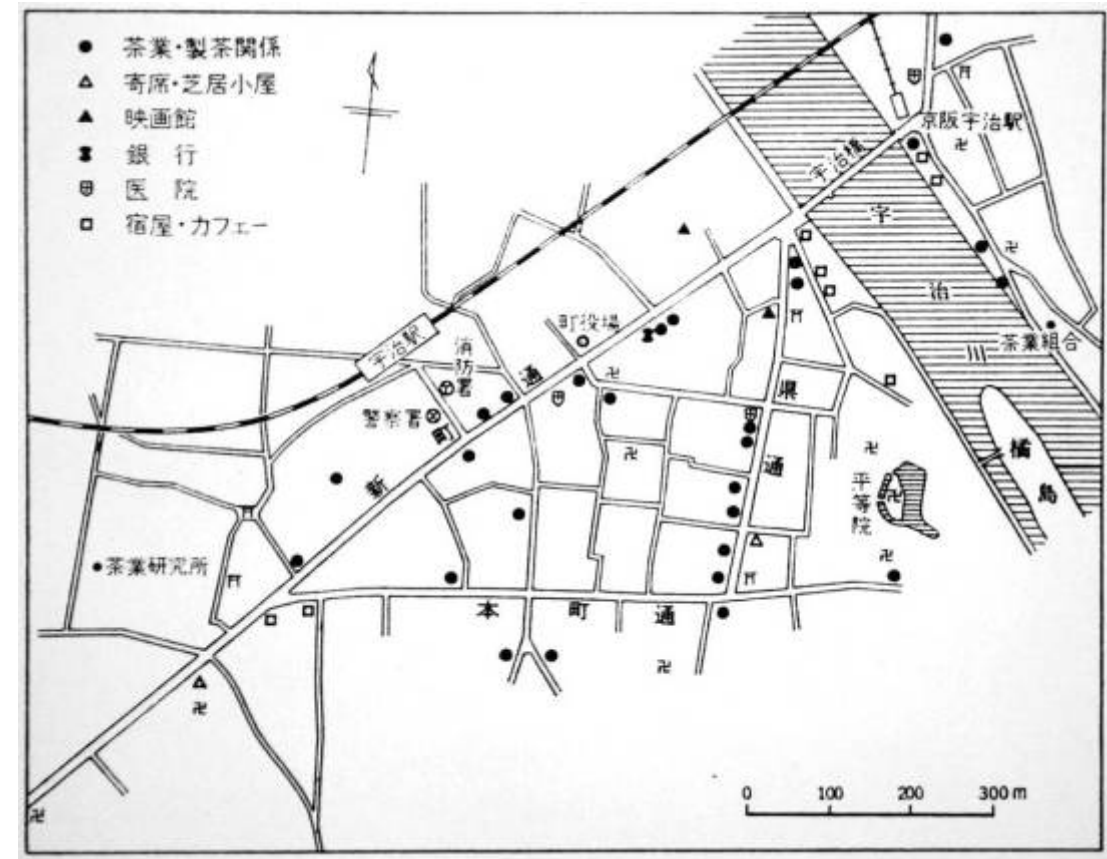
② 加工場と加工技術の伝承

～宇治市域全体

- ・茶葉の加工は、木幡や小倉、宇治、白川など、市内各所で現在も行われている。
- ・茶葉を加工する行為は、近代化が進んでいる。ただし、伝統的な手もみの茶づくりの技術に関しては、市の文化財指定を受けて、「宇治茶製法技術保存協会」によって受け継がれている。
- ・工場は共同化が進み、また規模の大きな工場は徐々に郊外に分散・移転が進んだ。しかし宇治地区の中心部には今も、個人規模の工場が稼働しており、製茶のシーズンになると、お茶の良い香りが漂う。



宇治地区で稼働する伝統的・家内工業的な製茶工場



宇治地区の茶業関係・公共施設の分布図（大正末～昭和初期）

③ 販売・流通

～宇治市域全体

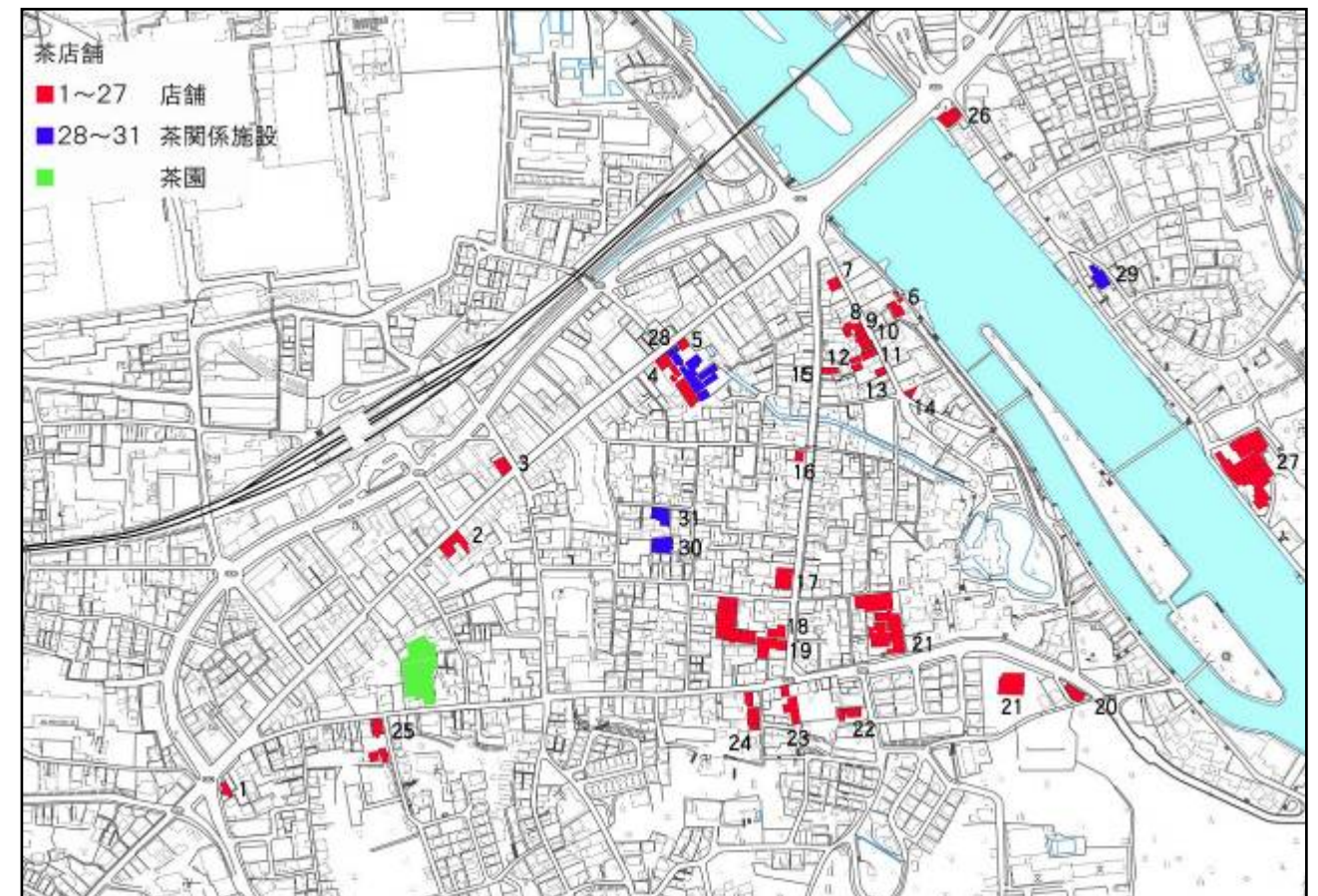
- ・宇治茶を販売する茶店舗は宇治市全域に展開しており、お茶のまちとしての景観がみられる。
- ・茶生産農家や茶問屋の所在場所は、江戸期に活躍した特権的身分の宇治茶師の確認できる場所と概ね重なり合い、茶問屋の中に茶師時代の家屋を継承する家もある。
- ・現在、平等院表参道沿いには茶店舗が集中して軒を連ねている。すでに、大正～昭和初期から茶業関係の施設が存在していたが、このような茶に関する町並景観が形成されたのは戦後のことで、修学旅行をはじめ平等院への観光が伸びてゆく中で観光客に向けて新たに形成された宇治茶に関する都市景観である。



茶商屋敷



お茶に関する小売販売店の集まる平等院表参道



宇治地区の茶関係建物の分布図

④ 献茶祭 ～宇治上神社・宇治神社・万福寺・縣神社・巨椋神社

- ・献茶祭は、新茶の収穫を感謝し、新茶を奉獻し、新茶の発展を祈る行事である。
- ・毎年、宇治上神社（6 月）、宇治神社、万福寺、巨椋神社（10 月）、縣神社（11 月）にて行われている。



宇治神社 献茶祭



萬福寺門前（黄檗）に建つ駒蹄影園碑の前で行われる献茶祭

⑤ 宇治茶まつり ～宇治橋・興聖寺・中ノ島付近

- ・宇治茶まつりは、栄西禪師と、明恵上人、千利休の三恩人への報恩感謝、茶業功労者の遺績を追慕するとともに、宇治茶の隆盛を祈願する行事で、毎年 10 月初旬に宇治川畔一帯で開催されている。
- ・儀式は、宇治橋三の間で行われるくみ上げ儀式、興聖寺本堂にて行われる茶壺口切の儀、興聖寺山門前にて行われる茶筥塚供養があり、多くの茶業関係者や観光客が見学に訪れる。
- ・宇治橋は上流側に三の間と呼ばれる張り出し施設を持つ。この三の間から豊臣秀吉が宇治川の水を汲み上げ茶の湯に使用したという故事が伝えられるなど、お茶との関わりも深い施設である。宇治茶まつりでは、三の間から宇治川の水を汲み上げ、お茶をたてる儀式に使用している。



宇治橋三の間で行われる儀式の様子

- ・宇治において「茶祭」が開始されたのは、昭和 7 年 10 月 1 日のことである。「宇治塔の島で日本初めての茶祭」と報じた『日出新聞』は、「式終了後は、同町各製茶業者の趣向をこらした祝賀の山車十数台は、祇園からの稚児三十名を先導に塔之島を出発、町内を屋台で姐さん被りの茶摘女の姿も美々しくねり廻り、午後二時からは塔之島に設けられた余興場で同町の古典的趣味豊かな宇治茶摘踊、万歳、落語その他の余興があり」と、その様子を伝えている。
- ・昭和 30 年代の古写真からも、宇治地区中心部を行列が練り歩き、踊りなども披露されていた様子がうかがえる。現在は、範囲は狭くなり宇治橋から興聖寺までを含む宇治川沿いで行われている。
- ・このように、近代に入って新たな行事として開催されるようになった宇治茶まつりは、形は変えながらも、今日の宇治における主要な年中行事として継承されている。



宇治茶まつり（昭和 32 年）



宇治茶まつり（昭和 32 年）



宇治茶まつり（昭和 30 年）

⑥ 朝日焼の窯元

～朝日山麓

- ・宇治は茶所として名声をあげたが、同時に多くの茶人によって好まれたものに朝日焼がある。宇治川の東岸朝日山の麓には、興聖寺と並んで朝日焼の窯元があり、宇治茶とともに茶陶として発展し、現在も窯の火を守り、伝統を継承している。
- ・初代陶作は慶長年間に開窯したと伝えられている。二代目は、茶人・小堀遠州の指導のもと「朝日」の銘を与えられた。小堀遠州は朝日焼のほかに、遠江の志戸呂、近江の膳所、大和の赤膚、摂津の古曽部、豊前の上野、筑前の高取の諸窯を指導しており、当時これを称して「遠州七窯」といった。さらには、当時淀藩主であり、宇治興聖寺の再興を行なった永井尚政との関わりがあったとされる。朝日焼は、永井尚政の財政的援助による開窯と、遠州の指導という組合せによって行なわれたと考えられる。
- ・朝日焼の茶陶の主流は、はじめ遠州や永井氏の庇護のもとに高級茶陶の生産に従事していたようで、とくに大名茶人として著名であった小堀遠州の指導によって開かれた窯として、寛永・正保期には一躍有名になった。三代目陶作が活躍する寛文・延宝期（1661～81）には有力大名の庇護が薄れ、元禄以後四代目長兵衛が窯元を継ぐ頃になると、茶陶ばかりでなく日常雑器的なものまで焼くような体制になり、その後しばらくして中絶している。しかし、幕末期になると、再び復興の機運が盛り上がり、慶応 2 年に再興願いが出され、翌慶応 3 年には開窯、焼き出しが行われている。幕末維新期の朝日焼は、急須・煎茶碗の生産が大半を占めており、煎茶の流行のなかで

順調に伸張していったと考えられる。

- ・朝日焼は、その名が示すように、朝日山にちなんでつけられたものである。朝日山の土を用いた作品は、鹿の背のような絵柄の出た「鹿背」や、ほのぼのとした朝日の情景を想わせる「燐師」など、土の窯変から生まれる色模様が特徴である。
- ・窯元には、朝日焼作品展示室が開館しており、歴代の作品などが展示されている。



現代の朝日焼の茶器

⑦ 茶香服

～匠の館・塔の島など宇治地区各所

- ・南北朝から室町時代にかけて、碾茶（抹茶）の産地を飲みあてて、その成績を競う「闘茶」が流行した。現在行われている「茶香服」は、この闘茶が発展したものと考えられている。
- ・「茶香服」は玉露や煎茶を飲み比べるもので、闘茶のような文化人による「高級な遊び」としての形態とは変容してきたが、宇治市では気軽に楽しめる庶民の遊戯として、お茶に関する各種イベントや、京都府茶業会議所が運営する「宇治茶道場匠の館」など、体験できる機会や場所の多い活動である。



白川地区で行われた茶香服イベントの様子

(3) 暮らしに息づく祭礼行事にみる歴史的風致

宇治における祭礼行事の最も古いものとして、離宮祭がある。離宮祭は、離宮八幡（宇治神社・宇治上神社）の例祭で平安時代を起源とし、すでに長承2年（1133）、往古の離宮祭に、旧宇治・槇島両地域の村民が氏子として奉仕している姿がみられる（『中右記』長承二年五月八日）。有力者の氏神として祀られていた神社も、やがては祭祀する氏人の変質にともなって、大部分が血縁という枠をこえた人々の崇拝を集めるようになる。白川の白山神社や縣神社のように、村落全体の産土神やより広範囲の人々の氏神へと変化移行する。あわせて、神社の例祭も中世・近世と時代を経るごとに、その時々的情勢を組み込みながら変容してきた。

現在もなお旧宇治町および旧槇島村の住民多数が氏子となっている宇治神社と宇治上神社、すなわちかつての「宇治神社二座」をはじめとして、木幡の産土神といわれる許波多神社、また旧大和田・広芝・岡本・岡屋・上村など付近諸村の産土神である五ヶ庄の許波多神社、旧小倉村の巨椋神社などは、はやくから村の鎮守社として祀られていたと考えられる神社である。そしてこれらは村落におこる諸々の災厄・悪疫を払うなど、村の構成員全体にとって重要なかわりをもつことがらに於いての神であり、村民全体が共同して祭礼を行ってきたのである。

現在も、市内各神社の例祭は、およそ旧村単位で氏子達が執り行っており、地域コミュニティを維持する重要な活動のひとつである。（木幡、小倉、伊勢田などに所在する神社の例祭については、現在確認中。）

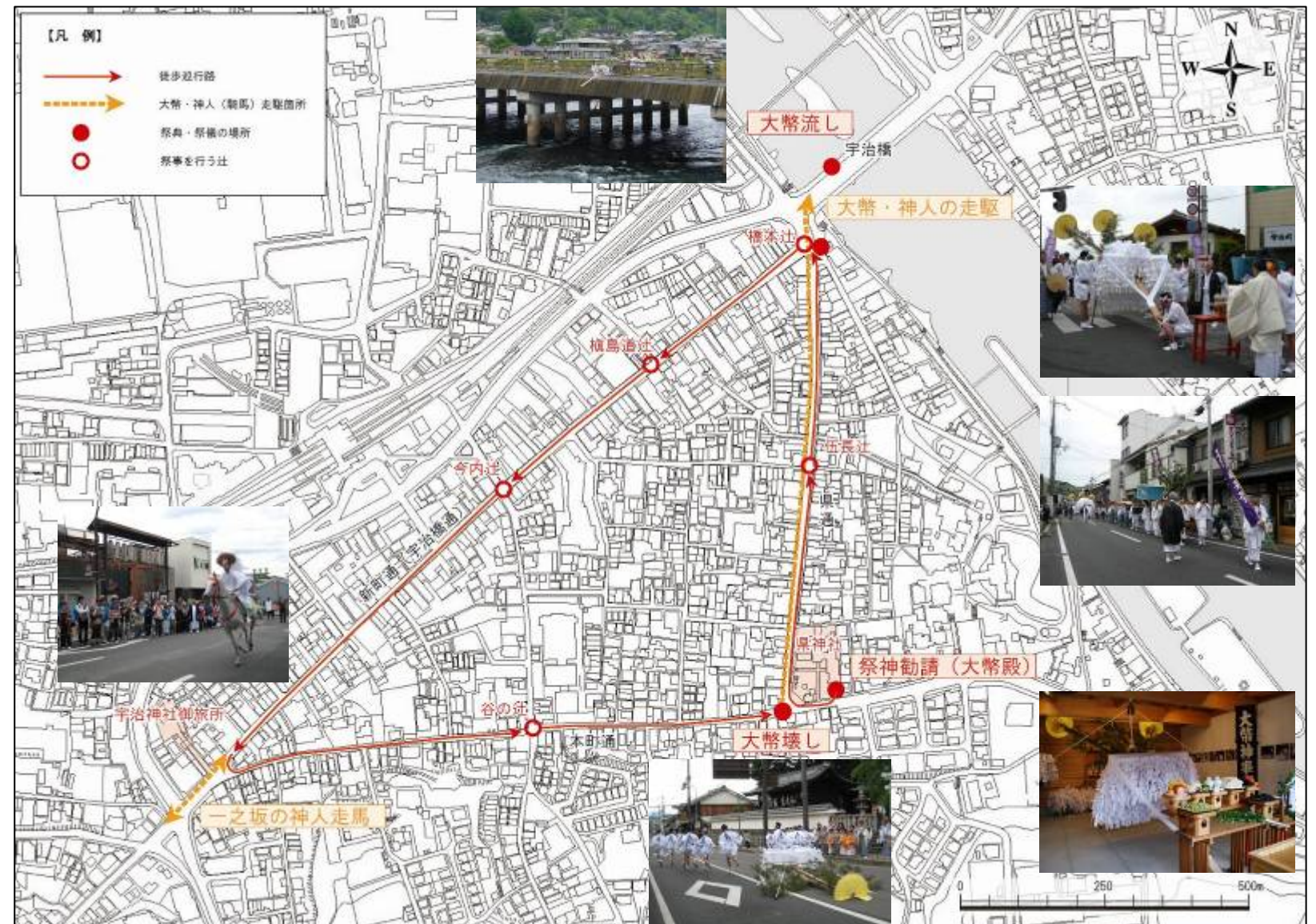
このほかにも、近畿一円から多くの人が見学に訪れ暗夜の奇祭と称される「県祭り」や、市内のほとんどの町内会で行われている地藏盆など、伝統的な行事がみられ、それぞれ活動組織や規模の異なる団体によって支えられている。

また、宇治市域において行われてきた民衆の芸能は、多く神事・信仰にもとづくものであった。民衆の心理的な支えとして神仏が存在し、生活習慣とは切り離せないものであったから、芸能には宗教的色彩が強いものであった。平安時代の離宮祭には、宇治の田楽が大々的に演じられていた。田楽は、10 数人が一団をなして、ビンザサラという特殊な楽器、厚みのない腰太鼓などを奏して踊るものである。古代から中世にかけて、宇治白川を拠点とした本座田楽のプロ集団が活躍していたが、やがて衰退していった。なお、平成10年度に復興された宇治田楽は、伝統的要素を取り入れた芸能まつりとして宇治市民が主体となって取り組んでいる活動である。

① 大幣神事

～宇治地区（中心部）

- ・大幣神事は、疫病を追い出すための宇治郷民による民俗行事で、疫病を流行させる原因と考えた疫神を趣向を凝らした神座に集めるために、様々な所作と伴に自分たちの生活圏を引き回し、最後にそれを川に流すものである。
- ・縣神社の大幣神事は、宇治神社の離宮祭（還幸祭）とともに6月8日に行われる。祭礼当日は、午前10時ごろ縣神社前の大幣殿にて儀式を行ったのち、大幣を担ぐ幣差（力者）や馬に乗った神人（御方）など、行列が出発する。行列は、県通りを経て宇治橋西詰に至り祭事を行ったのち、宇治橋通りを進んで一の坂に至るとそこで休憩し、御旅所との間を4往復する駆け馬が行われる。その後は本町通を進んで大幣殿へと戻るが、そこで大幣は引き倒され、幣差たちが引きずって宇治橋から川に投棄する。
- ・この神事を運営するのは大幣座という組織で、旧宇治郷の有志が中心となった地縁的なまとまりである。
- ・祭の主役ともいえる大幣は、大幣座のメンバーによって大幣殿にて6月1日に組み立てられ、翌2日の夜、和紙の幣を貼り付ける作業を行い完成させる。

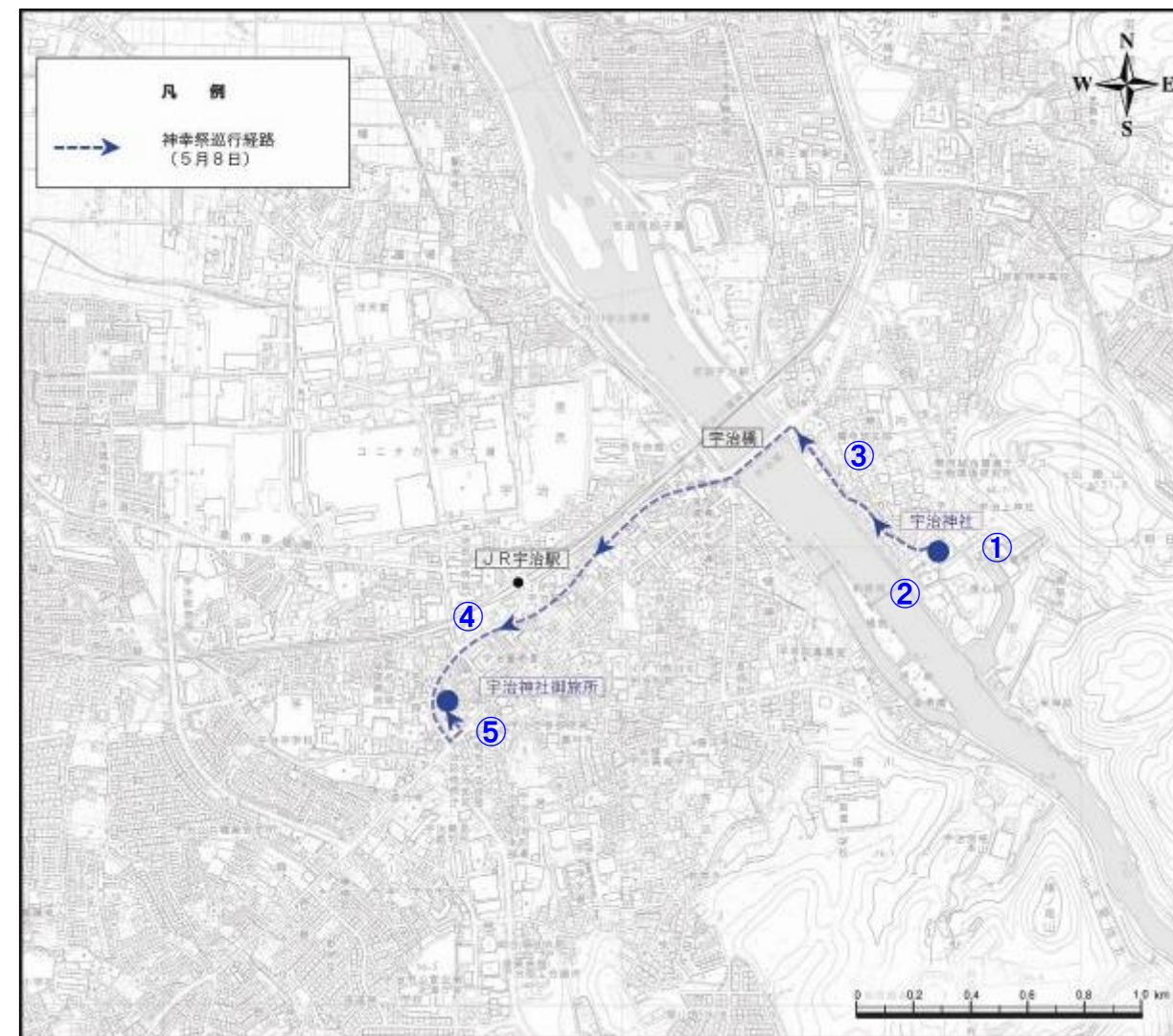


大幣神事の巡回ルートと祭儀場所（宇治地区）



江戸時代の大幣神事（上）と離宮祭（下） 『菟道旧記』

「大幣」の名称の初見は、近世中期を遡り得ないが、神事に使用する用具・衣装などは、古代・中世の形態をうかがわせる。町衆や郷民が主催する大がかりな疫神送りの民俗行事は、祇園祭のように室町時代に盛んになるが、宇治郷の郷民による大幣神事もその頃から行われはじめた可能性が高い。



② 宇治神社離宮祭（還幸祭）

～宇治地区全体・菟道地区の一部

- 宇治郷と呼ばれた地域は、宇治神社を氏神としており、地元の祭りとして還幸祭が毎年6月8日に行われる。当日は、還幸祭に先立ち縣神社の大幣神事が行われるため、宇治の町場に災いをもたらす疫神を追い祓う行事と、平安時代からの離宮祭が重なり、地元にとっては大幣神事のことを離宮祭の昼の祭礼という認識が強いものとなっている。



離宮祭・大幣神事の変遷模式図

- 宇治神社の例祭（離宮祭）である、還幸祭は6月8日に行われる。還幸祭の巡行は、御旅所を出発したのち、正午近くから日没をかけて、旧宇治郷全体を練り歩く。ルートは一定ではなく、毎年変わるということであるが、中心部の三角形街区は毎年ルートに含まれるようである。
- 離宮祭の一月前の5月8日には、神幸祭が行われる。ルートは、宇治神社から出発し宇治橋を経て御旅所に至る直線的なルートである。
- かつては、宇治郷の各町から数人ずつ担ぎ手が出ていたが、明治初年からは旧来の町をいくつか合わせた番組または班と呼ばれる合計9つの組織の持ち回りとなり、毎年交代で運営されている。



①境内にて御輿の組み立て



②宇治川べりで「御輿洗い」



③あさぎり通りを巡行する様子



④御旅所に向かって巡行する御輿



⑤宇治神社御旅所に到着



①御旅所から出発



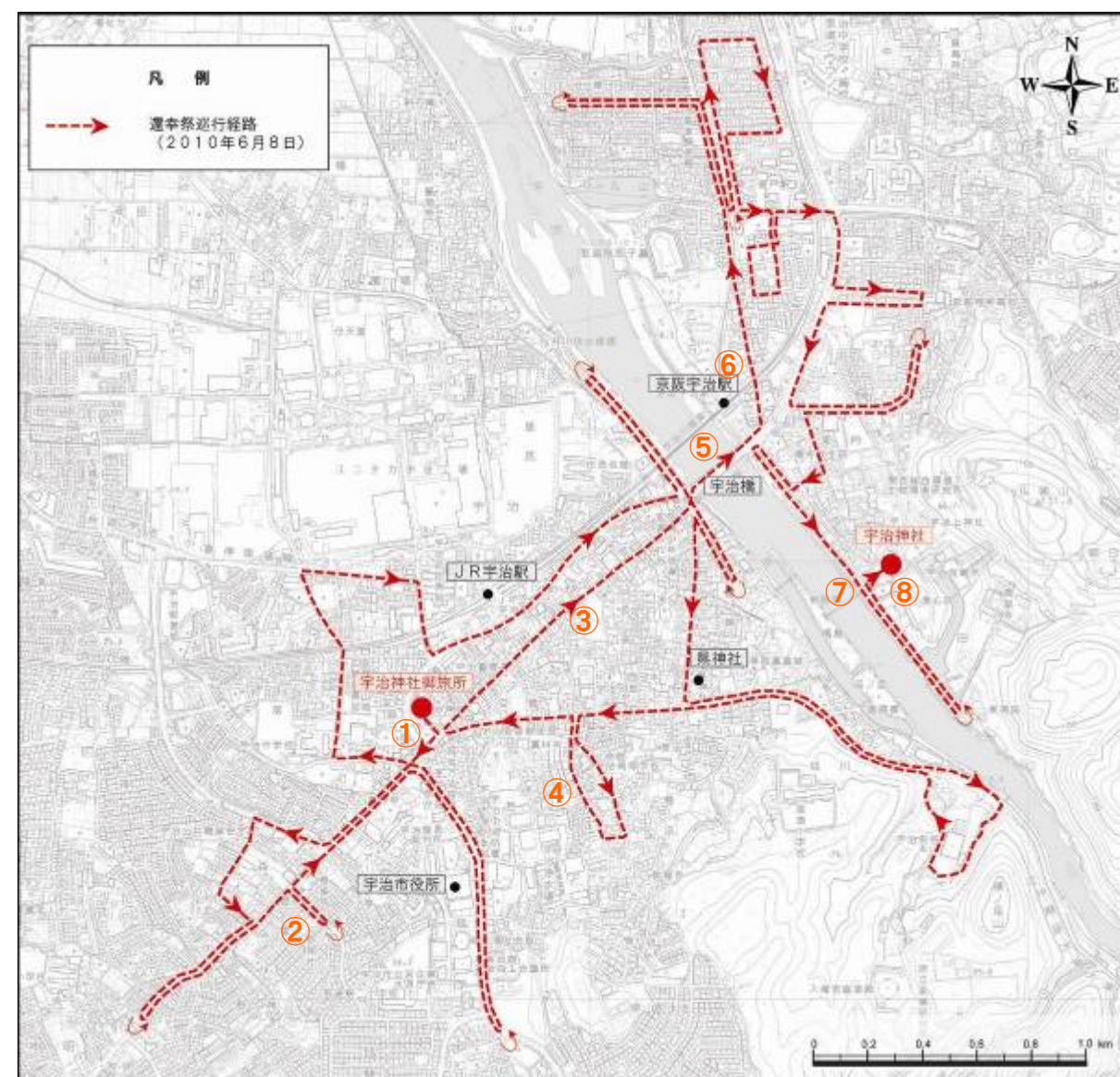
②野上神社前にて休憩



③宇治橋通りを巡行する様子



④本町通りから南に伸びる旧道を巡行



⑤宇治橋は御輿を担いで渡る



⑥JR の高架をくぐる際は上部の飾りを外す。



⑦宇治神社の階段を御輿を担いでかけあがる



⑧御霊を本殿へと戻す儀式

③ 宇治上神社祭礼

～宇治上神社・榎島地区

- ・宇治上神社の祭礼は、氏子である榎島地区の住民が主体となって執り行われる。
- ・5月1日に、榎島地区の集会所へと2基の御輿を移動させる。5月5日に地区内を回りながら宇治上神社へと戻る。
- ・元来の離宮祭は、宇治と榎島の合同祭であった。御旅所もかつては共同で利用していたが、鉄道の敷設によって、現宇治中学校の北から宇治橋通りへと移動したため、宇治上神社の巡行経路は、現在の集会所が御旅所とする経路となった。



①宇治上神社を出発



②宇治橋を巡行する様子



①集会所を出発



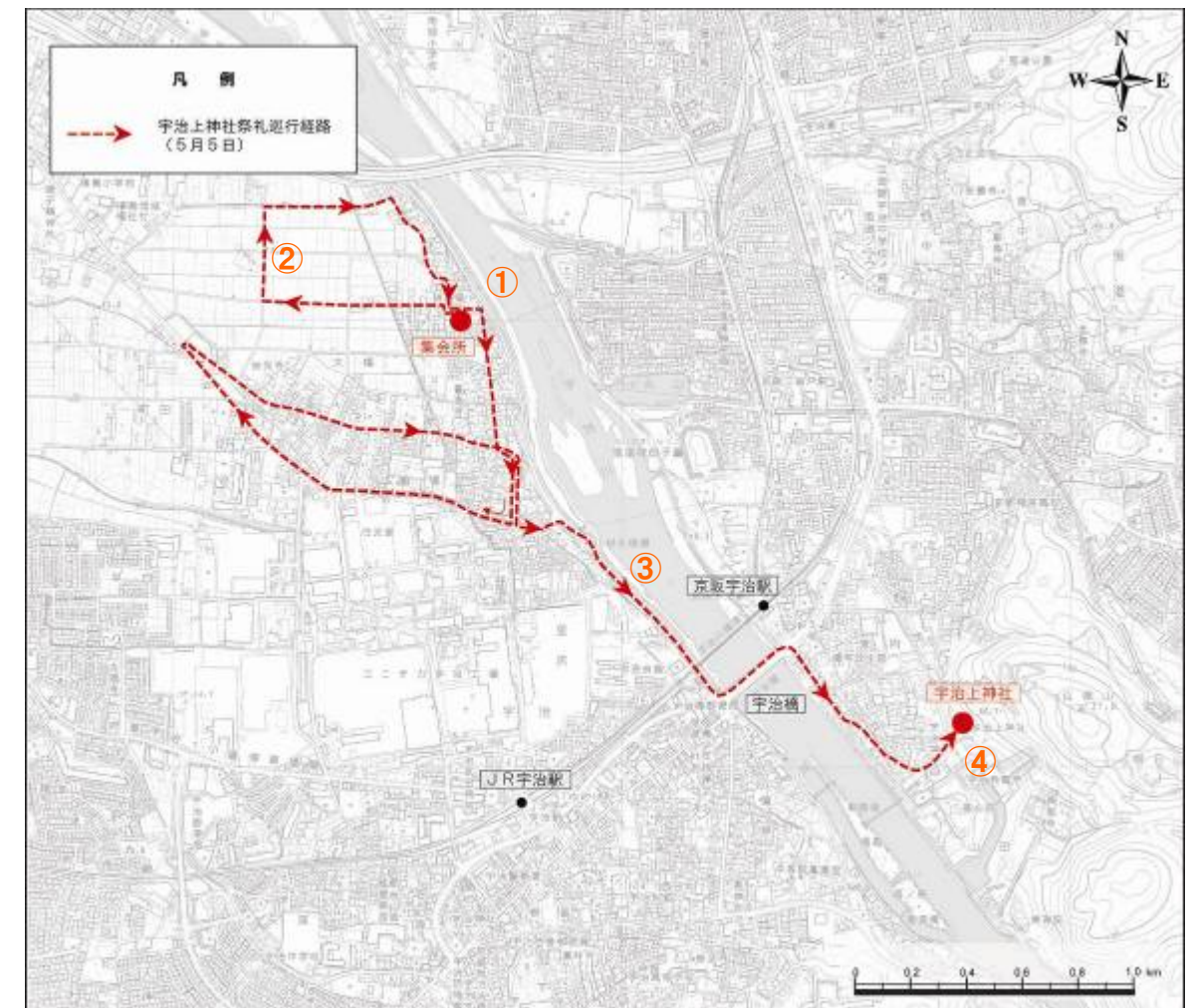
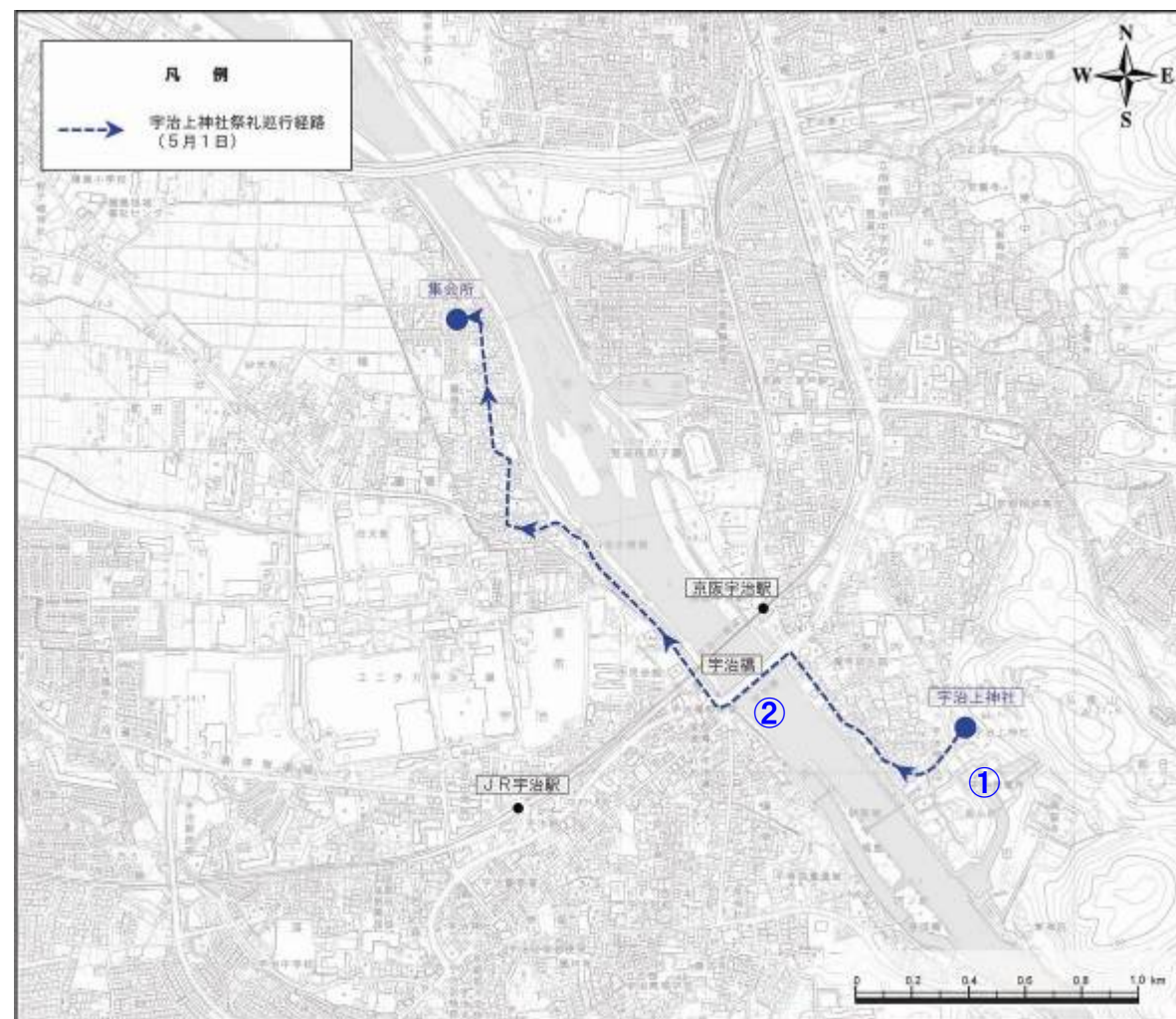
②巡行の様子



③宇治川に沿って巡行する様子



④宇治上神社に到着



④ 県祭り

～宇治地区中心部

- ・県祭りは、毎年6月5日から6日未明にかけて行われる縣神社のお祭りで、宇治を代表するお祭りのひとつである。深夜に沿道の灯火を全て消して暗闇の中を梵天渡御が行われることから、別名「暗闇の奇祭」などと呼ばれている。神殿に供物を捧げる「朝御饌」「夕御饌」の儀式に続いて、祭りの山場「梵天渡御」が始まる。夜も更けた頃、神の依代である大きな梵天（御幣）神輿が、暗闇の中で神移しをして渡御儀に入る。
- ・梵天渡御の儀式は、午後11時ごろ青竹の先に直径約2mの球状の御幣を付けた梵天を載せた御輿と、雌獅子・雄獅子の各御輿が、宇治神社の御旅所を出発し、県神社までの約2kmを練り歩く。とりわけ、御旅所前や宇治橋西詰などでは、男集たちが担いだ梵天を回転させる勇壮な「ぶん回し」が行われると、沿道を埋める見学者から大きな拍手と歓声が沸きあがる。
- ・県祭りがにぎわいを見せるようになったのは、近代以降のことである。かつては、旧暦5月5日の夜半に執り行われていたことが知られるが、その形態を具体的に記したものはなく、近世における祭礼の状況については不明な点が多い。
- ・県祭りには、摂津・河内方面の各地で組織される講社をはじめ、近江・大和・播磨などの各地から多くの信奉者が参集し、神の依代である梵天渡御に奉仕する。近世初頭以来、本来縣神社を祭祀すべきであった平等院は衰微しており、縣神社を維持するため、遅くとも近世中期以前から、近畿一円にその神徳を宣布し、火除・安産・縁結び・商売繁盛などの祈願を勧めることに努めた。その結果、信奉者は飛躍的に増加したと推定されるが、それらの人々による県祭への奉仕の萌芽はすでに近世中期にみられ、後期には有力な講社が各地に誕生している。
- ・県祭りは、新茶の収穫を祝い、出稼ぎで来た人たちの労をねぎらう、祭りでもある。宇治地区中心部の宇治橋通り・県通り・本町通りには露店が並び、お茶屋では新茶の大売り出しを行い、多くの人々で賑わう。



各御輿が鎮座する宇治神社御旅所



獅子神輿のぶん回し



梵天のぶん回し

⑤ 白川の祭礼

～白山神社 白川地区

- ・白川の白山神社は、藤原頼道の娘で後冷泉天皇の皇后寛子が康和4年（1102）に建立したとされる金色院の鎮守社であった。金色院は、本堂のほか多くの堂塔や坊舎を擁していたといわれているが、現在では白山神社と惣門、寛子の供養塔といわれる九重石塔が残るのみである。重要文化財である拝殿は、建治3年（1277）建立で、宇治離宮の遺構と伝えられている。祭神は伊邪那美命で、平安時代後期の木造座像（重要文化財）を祀っている。
- ・白山神社には興味深い神事が、住民の崇敬によって伝承されており、白川地区は産土神に対する信仰が現代も色濃く伝わる地域として知られている。白山神社の祭礼は、春祭り（3月18日）、虫干し祭（7月18日）、秋祭り（10月18日）、御火焚祭り（12月18日）の4回行われるが、特に10月18日の例祭前夜に白山神社に供えられる「百味の御食（おんじき）」という神饌は山間の農村にふさわしい素朴なもので、宇治近傍には他に例をみない特異な形態を伝えている。
- ・白山神社の百味の御食は、例祭の前日、頭屋（毎年持ち回りされる世話係）が白川にて入手できる百種をこえる農産物をシダの茎で作った軸に差し、それらを南瓜の表面に突き立て、さらに南瓜の上部には粳米・糯米の穂を立て、周囲は茶の枝葉で取り巻くように飾り立てて仕上げるものである。深夜になると、頭屋3軒がそれぞれの神饌を持ち寄り、神酒・赤飯・豆腐を添えて、揃って神前に献上する。この百味の御食は、夜が明ける前に下げられて社前の寺川に流される。また、住民たちは夜中に神前に参拝するが、神前は暗闇のため全くこの神饌を見ることができないという。この百味の御食として供えた農産物の品目は、製作中に頭屋の家族によって克明に記録され、その記録は翌年の頭屋3軒に伝えられていく。
- ・このほか、白山神社では毎年正月3日に、白山宮宝印を押した奉書を檜の切枝の先端に挟み、雷除・厄除の護符として村内各戸に配布している。そのため、白川に雷災は無いという俗信が古くから存在する。
- ・また、7月18日に行われる虫干し祭には、白山神社祭神の神像を礼拝する儀式を行うと共に、空豆の茹でたものを村内に配って歯痛の呪いとするなど、産土神に対する住民の信仰を顕著に見いだすことができる。
- ・伝統ある神事・行事が白川の住民の手で継続されているのは、この地が山間の盆地で開発の影響が少ない場所であったことと、白山神社に対する白川の人々の崇敬の強さにあり、現在も住民によって確実に伝承されている。



白山神社拝殿（重要文化財）



百味の御食の神饌をつくる様子



虫干し祭（砂礫で埋まる堰の川浚いによって、採取したきれいな砂を、村中総出で参道に敷く作業を行った）

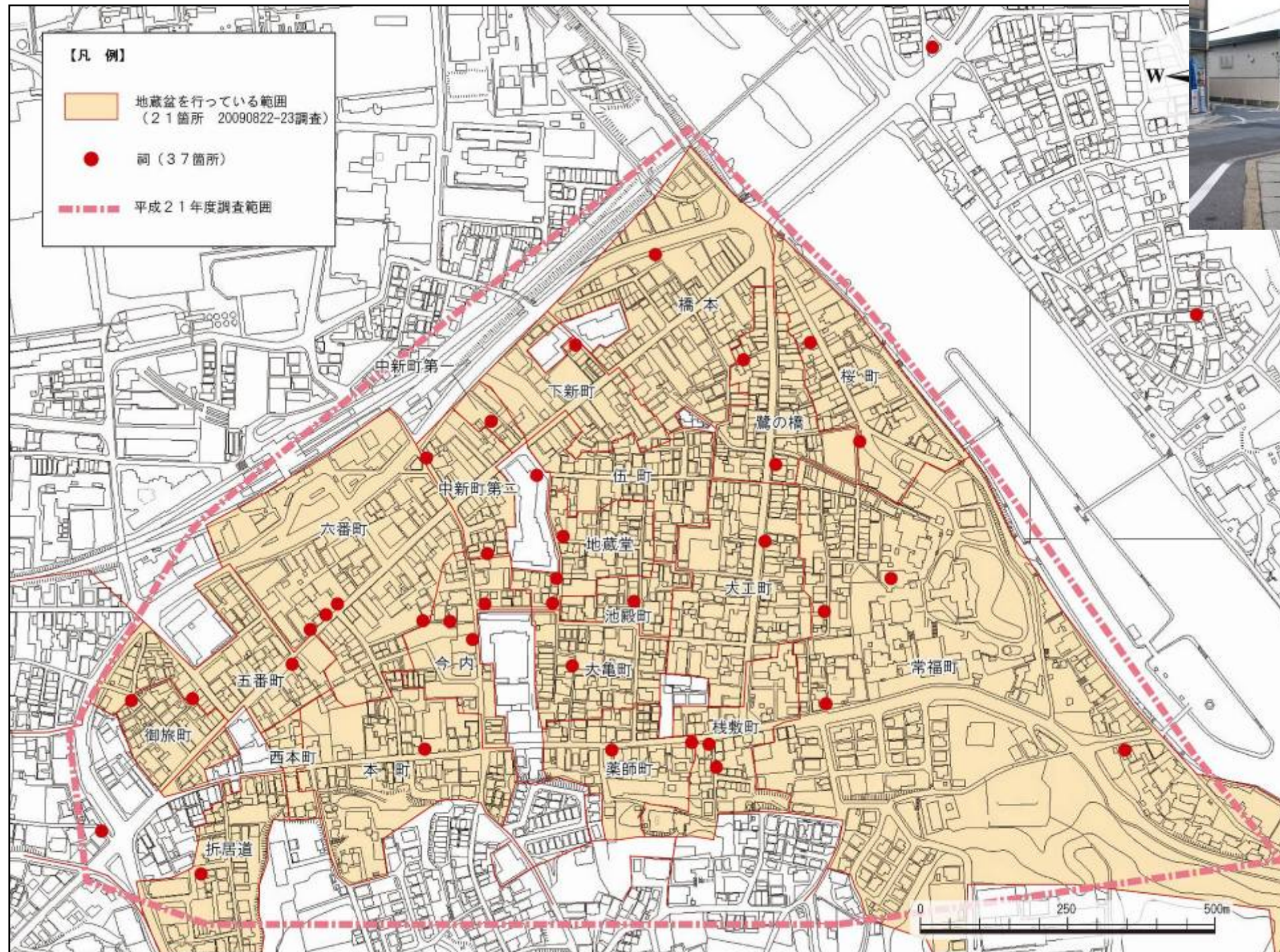
⑥ 地蔵盆

～市内全域

- ・町内会ごとに行われている夏の恒例行事であり、地蔵の祠は市内全域に分布している。
- ・特に宇治地区は、地蔵祠の数多く、地蔵盆の行事は現在もさかんに行われている。宇治地区において、大幣神事などの祭礼とともに、辻や路傍の石仏前で行われる地蔵盆などの民俗行事は、安定した地域社会を維持してゆくための重要な装置として伝えられてきた。



宇治地区の各所でみられる「お地蔵さん」



地蔵祠の位置と地蔵盆を行っている町の範囲（宇治地区）



祠の前を会場にした地蔵盆の様子



地蔵盆（数珠繰り）の様子

【参考資料】 宇治の神社 年間行事日程（昭和 45 年時と現況比較）

神社名	祭礼行事	昭和 45 年時点	現 況 ※	備 考
橋姫神社 （宇治蓮華 47）	年次祭 月例祭 年次祭 月例祭	7 月 10 日 各 月 10 日 7 月 31 日 各 月 末 日		橋姫社 橋姫社 住吉社 住吉社
縣神社 （宇治蓮華 72） * 赤字は、昭和 45 年 調 査 票 に 伝 承、伝説と記載 されていたも の。	初あがた祭 節分厄除祭 祈年祭 あがた祭（例祭） 大幣神事 献茶祭 新嘗祭（しまいあがた祭） 月例祭 大祓式	1 月 5 日 2 月 3 日 3 月 5 日 6 月 5 日 6 月 8 日 11 月 5 日 12 月 5 日 毎 月 5 日 6 月 30 日/12 月 31 日	1 月 5 日 6 月 5 日 6 月 8 日 11 月 5 日	ルート図有。
神女神社 （志津川龍ヶ壺 1）	歳旦祭 祭礼日（お祭り）	1 月 1 日 11 月 1 日		
十八神社 （菟道奥の池 6）	歳旦祭 祭礼日（お祭り）	1 月 1 日 11 月 3 日		* 三室戸寺
敵島神社 （菟道東中 26）	歳旦祭 縁日祭（俗に言う弁天祭） 祭礼日（お祭り）	1 月 1 日 7 月 17 日 11 月 3 日	11 月 3 日	
許波多神社 （五ヶ庄古川 13）	歳旦祭 節分厄除星祭 神武天皇祭 出御祭 例祭（大祭） 宵宮祭 神幸祭	1 月 1 日 2 月 3 日 4 月 3 日 10 月 26 日 11 月 2 日 11 月 3 日	11 月 3 日	
許波多神社 （木幡東中 47-1）	歳旦祭 月並祭 節分祭 春祭 秋祭 新嘗祭 大祓式	1 月 1 日～3 日 各 月 1 日 2 月初旬 4 月 1 日 11 月 3 日 11 月 23 日 12 月 31 日	11 月 3 日	

神社名	祭礼行事	昭和 45 年時点	現 況 ※	備 考
宇治上神社 （宇治又振 37）	元旦祭 節分祭 宇治上神社祭礼 献茶祭 八朔祭 御火焚祭	1 月 1 日 2 月 4 日 5 月 5 日 記載なし 9 月 1 日 12 月 15 日	5 月 5 日 6 月 1 日	ルート図有。 1996 年より始まる
下居神社 （宇治下居）	祈年祭 例祭 新嘗祭	3 月 23 日 10 月 23 日 11 月 23 日		
白山神社 （白川宮ノ後）	祈年祭 虫干祭 例祭（百味の御食） 新嘗祭（御火焚祭）	3 月 18 日 7 月 18 日 10 月 18 日 12 月 18 日	3 月 18 日 7 月 18 日 10 月 18 日 12 月 18 日	
巨椋神社 （小倉町寺内 31）	例祭 新嘗祭 祈年祭	10 月 1 日 11 月 末 日 3 月 末 日		
伊勢田神社 （伊勢田町若林 13）	例祭 新嘗祭 祈年祭	10 月 1 日 11 月 末 日 3 月 末 日		
蛭子嶋神社 （槇島町石橋 28）	例祭 新嘗祭 祈年祭	9 月 30 日 12 月 中 旬 3 月 末 日		
宇治神社 （宇治又振）	節分祭 神幸祭 環幸祭 七夕まつり 献茶祭	記載なし 5 月 8 日 6 月 8 日 記載なし 12 月 1 日	2 月 1 日 5 月 8 日 6 月 8 日 7 月 7 日 <u>10 月 1 日</u>	ルート図有。 ルート図有。

※空欄については、現在確認作業中。

